

日本オリエント学会だより

- 1) 第56回大会 2) 学会奨励賞 3) 作文コンクール 4) 広報委員の委嘱 5) 新入会員 6) 会員消息

1) 第56回大会

期 日：2014年10月25日（土）～26日（日）

会 場：上智大学四谷キャンパス

担 当：第56回大会実行委員会

委員長：私市正年

委 員：赤堀雅幸，岩崎えり奈，小牧昌平，深見奈緒子，岡戸真幸，高橋圭，登利谷正人，
三代川寛子，茂木明石

第1日 10月25日（土）

14：00～ 公開シンポジウム

17：15～ 奨励賞授与式

18：00～ 懇親会

第2日 10月26日（日）

10：00～ 研究発表

参加者 248名

プログラム

第1日 公開シンポジウム 2号館508室

オリエント研究―「古代への情熱」と「未来への夢」―

基調講演：月本昭男（上智大学）「ギルガメシュ叙事詩の現代性―その死生観をめぐって―」

講演：①安倍雅史（東京文化財研究所）「シリア―歴史的遺産と文化的多様性の危機―」

②太田敬子（北海道大学）「『オリエント（近東）』の歴史とイスラーム史―歴史の共有と借用―」

③三代川寛子（上智大学）「古代エジプトへの情熱，古代エジプトにみる夢」

パネルディスカッション（パネリスト）：

①月本昭男 ②安倍雅史 ③太田敬子 ④三代川寛子

第2日 研究発表 5部会

紀尾井坂ビル地下：紀B－112，104，108，105，107教室（口頭発表）

紀尾井坂ビル地下：紀B－111（ポスター発表）

研究発表者・題目

第1会場

1. 中野 智章 エジプト初期国家における石碑について
2. 平山 洋 神々・王・聖職者：テキストによる古王国時代ピラミッド内部の空間動向の再現に向けて

3. 高橋 寿光・西坂 朗子 古代エジプト、クフ王第2の船船坑の蓋石に記されたグラフィティについて
4. 柏木 裕之 古代エジプト、クフ王第2の船 船坑の掘削手順について
5. 矢澤 健・吉村 作治 エジプト・ダハシュール北遺跡のシャフト墓の形状と分布について：中王国時代の墓地形成過程解明に向けた試論
6. 河合 望 エジプト、アブ・シール南丘陵遺跡における中王国時代の祭祀の性格について
7. 和田浩一郎 エジプト・ダハシュール北遺跡の私人墓から出土した太陽神の船のレリーフについて
8. 深谷 雅嗣 カルナク神殿におけるトトメス三世の新年祭レリーフ
9. 田澤 恵子 古代エジプトの三柱神：その構造と機能
10. 藤井 信之 松岡美術館所蔵の木製人型棺について：制作年代と被葬者の家系をめぐる問題を中心に

第2会場

1. 西秋 良宏 中東ネアンデルタール社会の人口変化：中期旧石器時代における文化進化をめぐる
2. 足立 拓朗・藤井 純夫 アラビア半島の遊牧化過程：ワディ・シャルマ1遺跡の調査から
3. 三木 健裕 紀元前5千年紀イラン南西部、鈍黄色黒彩土器の展開：タル・イ・バクーン A, B 遺跡出土土器を事例として
4. 山藤 正敏 銅生産拠点後背地の土地利用：ヨルダン南部ショウバック北地域の前期青銅器文化
5. 西山 伸一 北レヴァント地方鉄器時代の Cooking Pot Ware：沿岸部と内陸部の変遷
6. 四角 隆二 3～7世紀のメソポタミア出土ガラスに関する考察
7. 津村眞輝子 サーサーン式銀貨における後刻印の再分類
8. 神田 惟 オリентから見た「オリент」：1958-1989年の「ペルシア三彩」蒐集を事例に

第3会場

1. 櫻井絵美夏 マリ王国の情報伝達におけるシャーピトゥムの役割
2. 山田 雅道 特殊な「世話」契約としての *RE 6*
3. 渡辺 和子 「エサルハドン王位継承誓約文書」の構成と儀礼
4. 山本 孟 ヒットイト語における「結びつき」とイシュヒウル文書
5. 吉野 宏志 エジプト語 sdm-f 活用への通言語的アプローチ
6. 小山 彰 デモティックにおける第2時制の文焦点化機能
7. 関廣 尚世 古代スーダンにおける「鉄」の象徴性について
8. 江添 誠 出土コインからみたウム・カイス遺跡の歴史の変遷
9. 長谷川 奏 エジプト西方デルタ・イドゥク湖南域の考古学調査：コーム・アル＝ディバーウ遺跡表層の生活痕跡を読み解く

第4会場

1. 三津間康幸 セレウコス朝およびアルシャク朝時代のバビロンにおける「市民」とその組織
2. 青木 真兵 ローマ支配下トリポリタニアにおけるフェニキア都市について：新ポエニ語碑文への分析を中心に
3. 佐藤 育子 西地中海におけるフェニキア人の活動：サルディニア・スペインの事例を中心に
4. 飯島 克彦 6世紀アンティオキアにおける災害：被災者の視点からの考察
5. 西尾 哲夫 シンドバード航海記の写本の分類と系統：筆写年入り写本として最古のペティス・ド・

ラ・クロワ『アラブの物語 海のシンドバード』をめぐる

6. 井上 貴恵 『愛する者たちのジャスミンの書』におけるルーズビハーン・バクリー・シーラーズィーの愛 ('ishq) 論
7. 宋 暎恩 ジャーミーの信仰における宗教的実践と存在一性論の接点
8. 青木 健 アーザル・カイヴァーン学派の新出写本と再評価：ゾロアスター教，照明学派，ヌクタヴィー教団
9. 土屋 遥子 法頭は何故インダス川の難所，断崖絶壁の「懸度」を辿ったのであろうか。パキスタン北部地方「法頭の道」現地調査（2012・2013）

第5会場

1. 貝原 哲生 初期イスラーム時代エジプトの地域社会における教会・修道院の役割：中部エジプトを事例として
2. 田中 悠子 イブン・アル＝ムカフファ著『*Risāla fī-l-Ṣaḥāba*』における理想の統治
3. 中野さやか サアラビー著『アフラク・ムルーク』における2種類のナディーム
4. 西村 淳一 12世紀以前のホラーサーンのウラマー社会における「よそ者」の位置づけ
5. 阿部 尚史 サファヴィー朝滅亡後のシェイフ・サフィー廟：王朝権力と地域社会の間で
6. 鈴木 真吾 イズミルにおける1893年のコレラ流行
7. 福永 浩一 エジプト・ムスリム同胞団における政治思想と活動の発展（1939-1954）
8. 松永 泰行 「遺産」としてのホメイニズム再考

ポスターセッション

1. 河合 望 カルナク神殿におけるトゥトアंकアメン王のステラに関する調査研究
2. 黒河内宏昌・吉村 作治・クフ王第2の船プロジェクト2012～13年度の活動
柏木 裕之・高橋 寿光・
山田 綾乃
3. 小茄子川歩 インダス式印章の製作技術に関する考古学的研究：SEM と PEAKIT を用いた彫刻および穿孔技術の検討
4. 長谷川修一・月本 昭男・アッシリア後のパレスチナ：テル・レヘシュ第8次発掘報告
津本 英利・小野塚拓造
5. 牧野 久実 ユダヤ食文化における浄，不浄の概念と土器型式
6. 近藤 二郎・吉村 作治・エジプト・ルクソール西岸で新発見されたコンスウエムヘブ墓について
河合 望・菊地 敬夫・
柏木 裕之
7. 関廣 尚世 メロエ遺跡製鉄炉の民族考古学的研究

第1会場

1. エジプト初期国家における石碑について 中野 智章

ミレニアム以降のヒエラコンポリス遺跡やデルタ地帯，パレスティナ地域などにおける調査の進展を受け，エジプト初期国家におけるさまざまな遺構や遺物を再解釈する動きが加速している。そうした中で，第1王朝期のアビドス遺跡から出土した私人石碑の集成がマーティンによって出版された。本発表ではその情報を活用し，近年議論が活発になっている第1王朝期のサッカラ墓地から出土した唯一の石碑について再検討を行った。

メリカの銘を持つこの石碑に関しては、1) 調査者のエメリーは付属墓に設置された（墓本体の被葬者は王）とし、2) ケンブは墓本体に設置された（墓本体の被葬者は高官メリカ）と考え、3) マーティンも同じく墓本体に設置された（墓本体の被葬者はメリカ）が付属墓は後代の作とし、4) オコナーは付属墓に設置された（ただし、墓本体の被葬者については判断を保留）とするなど、見解が大きく分かれている。

マーティンが集成したアビドス遺跡出土の350点におよぶ私人墓碑は高さが10-60cm、幅が10-30cm、厚み1-17cmの範囲にほぼ収まっており、陽刻で彫られた文字や意匠、碑表面の加工や調整痕からは、それらがもともと小型の付属墓にはめ込む形で制作された様子がうかがえる。

その点を考慮に入れてメリカ銘を有するこの碑を再検討すると、碑が出土した3505号墓は第1王朝期のサッカー墓地最大の墓とされるものの、実際は付属施設を含めた面積が最大であるに過ぎず、墓本体は地上の上部構造が同墓地の他の墓に比べても約35×24mとさほど大きくはなく、しかも内部に部屋は認められないなど、アビドスの付属墓がそのまま大型化した印象を受ける。また地下の下部構造へ向かう斜路は地上の通路に沿う形で設けられ、墓本体を囲む周壁も隣接する葬祭殿に直結するなど、墓と葬祭殿は一体で造られた可能性が高く、その点は葬祭殿から出土する土器型式からも確認が可能である。

よってこのメリカ銘を有する石碑は、当初からこの3505号墓本体にはめこまれた被葬者のものと考えるのが妥当であり、その石碑のありかたはアビドスの付属墓に見られる特徴と同一であったと推察される。ともあれ、墓に葬祭殿を隣接させるこの墓の構造は他になく、更なる考察から第2王朝の王墓がアビドスからサッカーへ移動した理由の一端が明らかとなろう。

2. 神々・王・聖職者：テキストによる古王国時代ピラミッド内部の空間動向の再現に向けて 平山 洋

ピラミッドテキストは、古代エジプトの最初のもっとも葬送文書であり、世界最古の宗教文書と言っても過言ではない。アレンは最大のテーマは死者と二つの神「オシリス神」と「太陽神」との関係性にあると指摘しており、死後の生活が夜明けに誕生するまでのドゥアト（冥界）を旅する太陽の夜の航行を原型として書かれている。太陽は、冥界の奥底でオシリスの身体と結合し、新しい生活の糧を得るので、亡骸の精神は毎夜オシリスと結合する事によって新しい力を得るのである。この太陽の日常の再生復活の概念は死後の生活の根源的な概念を含んでいる。かつてこの二つの神は独立した別々の概念の中でエジプト学者の中で捉えられていたが、近年死者の死後の永遠の生に対する同一の概念として考えられている（Allen）。

筆者は少なくとも第4王朝末期にはオシリス神が登場していたと考えており、主にギザ台地、特にカフラー王・クフ王の治世の遺構、ピラミッド複合体の考古学的解釈に着目している。葬祭儀式は神殿儀式との関連性の中で解釈されるべきであり、第4王朝末期にはテキストを含むウナス王第5王朝末期以降のピラミッド地下構造の原型が完成していると考えられ、ピラミッドテキストの解釈はテキストが登場するまでの王の建造物の考古学的解釈の仮説・検証をする上で極めて重要である。オシリス神に関しては、王に関する宗教文書で最初に登場するのがピラミッドテキストであり、最も包括的に知る手掛かりとなる。聖室における祭儀では死者（亡王）にカリスマ的なシンボル、つまり「オシリス」という名前を与えることによって客観視している。しかし、ピラミッドテキストは神話上で複数の時々矛盾している印象があり、様々な伝統が混在して、異質なものが混ぜ合わさっている。こうした複雑かつ膨大なテキストをどう読み解くか。

筆者はここ数年、特にオシリス神に関してピラミッド内部の各部屋ごとにどのような種類のテキストが現れるかをテキストが現存する古王国時代の全てのピラミッドテキストから検証している。その作業過程でテキストが追加・削除・転換され一定の連続性を持つなどの幾つかの法則を見出し、オシリス＝王（wsir NN）の解釈を検討した。さらに先行研究のスピーゲル（Spiegel）、ショット（Shot）、アルテンミュラー（Altenmüller）、

特に最近のヘイズ（Hays）の研究成果を元に、テキストは①聖職者の祭儀と②個人の祭儀に大別されること、テキストの主体（話者）となるものは聖職者なのかそれとも被葬者（王）であるのか或いは神々なのかを検討した。また、人称（一人称・二人称・三人称）により語り部が変わること、王ごとにその人称が変換されている場合があること、テキストの方向性、ピラミッド内部各部屋（通路、広間、控えの間、玄室）の性質、関連性、位置関係から、実際にピラミッド内部で祭儀が行われていたとすれば、聖職者の行為、神々の役割はどのようなものであったか、或いは被葬者（王）はどのような立ち位置にあったのかの空間動向の再現を試みる。

3. 古代エジプト、クフ王第2の船船坑の蓋石に記されたグラフィティについて 高橋 寿光・西坂 朗子

古代エジプト、古王国時代のクフ王第2の船を納めた船坑は、エジプト、ギザのクフ王ピラミッドの南脇に位置し、重さ平均約16トン、平均約4m×1.5m×0.8mの蓋石39枚で封鎖されていた。2011年に「クフ王第2の船復原プロジェクト」の一環として、早稲田大学・エジプト政府合同調査隊によって取り上げられた蓋石には、赤、黄、黒の顔料で文字やマークが記されていた。本発表では、こうした文字やマークを「グラフィティ」と呼ぶ。

蓋石のグラフィティは、異なる色が1つの石材に混在する場合、上書きされている場合、異なる向きのグラフィティが混在する場合などがある。また、石材の整形面に書かれている場合、粗い整形箇所には書かれている場合、グラフィティが鑿で削られている場合もある。こうしたことから、グラフィティは採石場から建設現場までの間の運搬や加工などに関わる様々な作業工程の中で書かれたと考えられる。

こうした点を勘案し、重なって書かれたグラフィティの上下関係やグラフィティの書かれた場所、鑿痕の有無、パティナの有無などの分析を行ったところ、蓋石の南北面のグラフィティが、西面、下面のグラフィティよりも相対的に古く、2段階に分かれることが判明した。また、蓋石の南北面には、アंक、ヘテブ、ネフェルなどの1文字のみが書かれるのに対して、西面、下面にはクフ王などの王名を含む文字列が書かれており、書かれるグラフィティの種類も異なることが判明した。

分析から2段階に分かれたグラフィティを、古王国時代クフ王の治世のパピルス文書から想定される作業工程にあてはめると、古い段階は、採石場から石材集積場までの間、そして新しい段階は、石材集積場から第2の船の船坑までの間にあたると考えられる。蓋石に書かれたアंक、ヘテブ、ネフェルなどのグラフィティが蓋石運搬を担当した労働者集団を示すとするならば、採石場から建設現場までの蓋石の運搬には異なる労働者集団が関わった可能性が考えられる。

これまで資料的な制限から、古王国時代の建造物の石材に記されたグラフィティに関する研究では、主にグラフィティの意味を論じるだけであったが、本研究では、グラフィティの書かれたコンテキストの分析から、更に時期差についても言及することができた。

4. 古代エジプト、クフ王第2の船 船坑の掘削手順について

柏木 裕之

クフ王の大ピラミッドの南側には、船を納めるための掘り込みが2基開削され、東側に埋納された船を「第1の船」、西側の船を「第2の船」と便宜的に呼び分けている。いずれも岩盤を上下二段の段丘状に掘り窪めた構造をし、下段の溝（船坑）には解体された船の木材が、上段（テラス）には蓋石が納められた。テラスの横幅は船坑からそれぞれ1m弱程度広げられ、蓋石の両端はその面（テラス面）で支持されている。本研究は下段船坑に残された補助線や書き付けの分析を通じ、第2の船における岩盤の掘削工程を復元的に描いたものである。

下段船坑の壁面には、赤色の水平線が4面に渡り連続して引かれていた。水平線は2基の船坑で認められ、

その位置はいずれもテラス面の下、約 27cm であった。検討の結果水平線は、船坑の周囲に用意された、蓋石を支えるテラス面を削り出すための基準線と判断された。これにより岩盤は、まず幅の狭い船坑が開削され、次にその内壁に水平の基準線が引かれ、そして基準線から半キュービット上に、上段のテラス面が作り出された、と想定された。

また 2 基の船坑の南面には、赤色の書き付けがそれぞれ 10カ所観察された。このうち第 1 の船の船坑では下すぼまりの三角形の中に寸法を記す書式が多く見られ、基本的な調査は行われたものの、意味と役割は不明とされてきた。第 2 の船の書き付けを分析した結果、三角形は「幅」もしくは「奥行き」を意味する文字の可能性が強く、2 キュービット前後の寸法値はテラスの幅を指示したものと解釈された。

船坑内面に残された水平線や書き付けの分析から、掘削は下段の船坑、上段のテラスの順に進められたことが導かれたが、テラス面は仕上げの終わった面を順に延長していけば完成させることができる。つまり、基準となるテラス面を参照することができるならば、水平基準線や書き付け自体不要であり、逆に言えば、参照することが困難であった状況が浮かび上がる。テラス面が視認できない理由として、完成したテラス面に蓋石が速やかに据えられた可能性が挙げられ、船坑やテラスの掘削作業と並行しながら、蓋石の設置作業が進められていた状況が想定されよう。船の木材が埋設される前に蓋石が、部分的にせよ、据えられていたことになり、その蓋然性を含めた一連の工程に関する最終的な結論は、現在第 2 の船で進められている木材取り上げ作業の終了を待って下すことにしたい。

5. エジプト・ダハシュール北遺跡のシャフト墓の形状と分布について：中王国時代の墓地形成過程解明に向けた試論

矢澤 健・吉村 作治

地下に竪坑を掘り、底に埋葬室を設ける「シャフト墓」は、中王国時代の墓地遺跡で数多く発見されており、20世紀初頭に調査・報告されている。膨大な数のシャフト墓から発見された副葬品の数々は、これまでの葬制研究における礎となってきた。一方、遺構そのものについては特徴的な例が図示されるのみで、記録は寸法だけの場合が多く、正確な位置情報も乏しかった。

早稲田大学によるダハシュール北遺跡の調査では、中王国時代に年代づけられる多数のシャフト墓が発見されており、トータルステーションによる測量に基づいた遺構の図面が作成されている。シャフト墓は大半が盗掘を受けており、副葬品の残存状況には差があるため、墓の先後関係や階層差を分析できる出土資料は限られてしまう。一方遺構そのものは盗掘や再利用によって大きく改変された様子がないため、遺構はより包括的な視点から墓地の時期差や階層差について議論するための材料になり得る。発表では、ダハシュール北遺跡におけるシャフト墓の形状を分類し、出土した副葬品との関係や、分布状況から見た傾向について考察を加える。

シャフト墓の形状は、竪坑の底から南側に埋葬室を設ける形式が大多数を占めていた。その他、埋葬室が北側のタイプ、南北両側のタイプ、南側に 2 層あるタイプ、東側あるいは西側の長側面に埋葬室が設けられたタイプ、部屋がなくシャフト部にそのまま埋葬されたタイプなどがあった。

シャフト墓のサイズに認められる差異は、副葬品との関係からおそらく階層差を反映していると考えられた。遺構形状の経時的変化については、現段階の資料では顕著な傾向は観察されなかった。一方、墓の方位については年代によるわずかな差を認めることができた。12王朝～13王朝初期に特徴的な遺物を含むシャフト墓は、シャフトの長軸が南北方向であるのに対し、13王朝初～中期に特徴的な遺物を含むシャフト墓は、長軸方向がわずかに西側、すなわち墓の東側面がより北東側を向くようになっていた。ダハシュール北遺跡の位置を巨視的に見ると、東に第12王朝のセンウセト 3 世ピラミッドを中心とする墓地が存在し、北東の南サッカラには第13王朝のケンジェルを初めとする王族・高官の墓地が位置している。中王国時代では、頭位方向と埋葬姿勢

に対する強いこだわりがあったことを考慮すると、長軸の変化は求心となる墓域が移行したことに由来する可能性がある。

6. エジプト、アブ・シール南丘陵遺跡における中王国時代の祭祀の性格について 河合 望

本発表は、アブ・シール南丘陵遺跡の南東斜面から出土した中王国時代の祭祀儀礼に関する考古資料と、図像資料、文字資料を総合的に検討し、当該遺跡における中王国時代の祭祀の性格を考察することを目的とした。

アブ・シール南丘陵遺跡における中王国時代の祭祀儀礼に関する考古資料は、南東斜面に穿たれた岩窟遺構 AKT01、岩窟遺構 AKT02、祭祀土器の廃棄遺構があげられる。これまで遺物、遺構の性格を検討した結果、岩窟遺構 AKT02 は儀礼祭祀の場、つまり礼拝の場として機能し、祭祀土器の廃棄場は、儀礼祭祀に使用した土器の廃棄場、そして AKT01 は、神像と儀礼に関する像の疑似埋葬の埋納場として機能したことが推測された。中王国時代の祭祀の性格を知る手がかりになる遺物は、特に岩窟遺構 AKT01 出土のライオン女神像と半身人物像である。ライオン女神像は、古王国時代よりアブ・シール地域で崇拝されたバステト女神、あるいはセクメト女神を表したと考えられる。一方、半身像は、髷を付け、髭を蓄え、両手を耳に当てていることから、類例からリビア人の歌手を表現しているものと指摘した。ライオン女神像も半身人物像もテラコッタ製と土製の2種類があり、セット関係である蓋然性は高い。したがって、半身人物像はライオン女神像に関連するものであるのならば、古代エジプトの祝祭で重用されたりビア人歌手の像である可能性は高いと推測される。また、大量に廃棄された祭祀土器の数は、ビールの奉献と焚香に使用されたものが多く、これらはライオン女神の祭祀儀礼に関連すると考えられる。

以上のように、考古資料から中王国時代にライオン女神への祭祀儀礼に関係する活動が存在したことは推定されるが、ライオン女神の祭祀儀礼に関する文字資料については、中王国時代に作成された『人類破滅の物語』や『太陽の眼の神話』があげられる。これらの神話にならい中王国時代頃から神殿の第1月の新年祭の一環で「酩酊の祝祭」というものが催され、遠方に行ったライオン女神の帰還の際、彼女の怒りをビールで鎮めるといふ神話にちなんで、ビールを飲んで酩酊状態となり、リビア人の踊りや歌とともに憑依状態を迎え、人々は女神から洞察を得ることを期待したとされる。当該遺跡のライオン女神像とリビア人像の疑似埋葬、大量の土器の廃棄堆積は、おそらくこのような「酩酊の祭」に関係する祭祀儀礼に関連するものであることを指摘した。

7. エジプト・ダハシュール北遺跡の私人墓から出土した太陽神の船のレリーフについて 和田浩一郎

ダハシュール北遺跡で2004年に検出された朗唱神官タの墓は、地上部分に石造の礼拝堂を備えた、新王国時代のメンフィス地域によく見られる神殿型平地墓だったことが分かっている。被葬者であるタの埋葬は盗掘されていたが、残存していた副葬品から第20王朝に比定される埋葬と考えられている。墓は礼拝堂がほとんど失われていたものの、太陽神の船を描いた大型レリーフが出土し、特徴的な壁面装飾を備えていたことがわかっている。本発表では、この太陽神の船のレリーフに関する考察を行った。

タの墓のレリーフを観察すると、画面中央に太陽円盤の中に羊頭の太陽神が描かれており、その上に有翼スカラベ、地平線上の太陽円盤の図像が配されている。全体として、日の出を表現した壁画であることが明らかである。これは太陽神の夜の旅をモチーフにした宗教文書、すなわち『アム・ドゥアト』や『門の書』、『昼・夜の書』に伴う船の図像表現との関連を推測させた。そこでレリーフに表現されている、①船首に架けられたマツトとうずくまる子供、②天から現れて地平線に太陽神を引き寄せる神々、③船に乗り組んでいる神々の構成、という三点に着目して類例の収集を行った。その結果、タの墓のレリーフは、『門の書』第12時にともなう太陽神の船の表現であると判断された。ただし③の神々の構成については、いずれの宗教文書の表現とも異

っており、メンフィスの地域的特徴を示している可能性が考えられた。

太陽神の夜の旅を主題とする宗教文書は、本来、ほぼ王族に限定されて用いられていた。しかしテーベ・ネクロポリスでは、第19王朝以降、私人墓でもしばしば『門の書』の使用が認められる。タの墓のレリーフは、こうした動向がメンフィス地域にも波及していたことを示唆している。ただしメンフィス地域において、宗教文書と結びついた太陽神の船の図像が確認されたのはタの墓の事例が最初と思われる。テーベと同様にメンフィス地域でも『門の書』が広く私人墓で採用されていたのか、また上述したような地域性が実際に存在したのか、といった疑問に答えるためにはさらなる資料の蓄積が必要である。

8. カルナク神殿におけるトトメス三世の新年祭レリーフ

深谷 雅嗣

カルナク神殿の内域東端に位置するトトメス三世祝祭殿(Ax-mnw)には、様々な祭礼に関する記録と図像が断片的に残されている。このうち、北側の供物台が位置する露天の空間とそれに続く二カ所の階段は、プトレマイオス朝からローマ時代に建造された各地の神殿の新年祭遺構と類似する。

後代の関連史料によると、新年を迎えるために、神像は神殿屋上の祠堂へ運び上げられ、Xnm-itn「太陽円盤との融合」がなされた。これは、神像を太陽光に晒して、神的力を更新する儀礼であった。理念的には、神殿のあらゆる資産、神殿自体、ひいては世界も同様の儀礼を受けたと考えられる。残念ながら、新王国時代の神殿のうち、天井が残存するものは少なく、屋上の構造を知ることは難しい。また、新年祭に関する記録は少ないという、研究者の従来の見解が広く受け入れられてきたこともあり、この祭の研究は、プトレマイオス朝以降の様子を中心に進められてきた。

ところが、Ax-mnwの露天空間の周辺に残るトトメス三世のレリーフの一部には、HAt-rnpt「年の先」という記述があるほか、お互いに類似する描写が、未刊行のものを含めて、複数確認できる。これらに共通するのは、「口開けの儀礼」と宝物庫の存在である。これらは、神像、神の舟、王像を更新、聖化する様子を描くと考えられ、その管理をしていた宝物庫が、儀礼上、重要な役割を果たしたと推測される。また、関連遺構が神殿の北に集中することや、新年祭式文から、新年祭とヘリオポリス神話の関係は明らかである。特に、ルクソールに残る同時代の他の神殿にも、北側に供物台を囲んだ露天の空間があったことは興味深い。加えて、宝物庫を司る神としてプタハが、カルナク神殿北域で重要な役割を果たしたことから、この区域がヘリオポリスとメンフィスを含むエジプト北方を象徴した空間だったと考えることも不可能ではない。

「南のオン」と呼ばれたテーベの宗教上の位置づけを明らかにするために、プタハ神殿を含めたカルナク神殿北域で進められている発掘調査の体系的な結果報告、公刊が待たれる。

9. 古代エジプトの三柱神：その構造と機能

田澤 恵子

多神教社会の古代エジプトには、個々に存在する三柱の神々で一つのグループを構成する「三柱神」というトライアド構造を意識した分類方法が存在した。これは、数多の神々を整理する、もしくは神の複数性と唯一性を説明または象徴するために便宜的に用いられたと考えられ、古代エジプトの宗教に特徴的な現象の一つとされた。1960年代以降、集中的に研究が進められ、古代エジプトの三柱神の組み合わせについては、①「一柱の神+二柱の神」、②「一柱の神+一柱の神+一柱の神」の二パターンがあり、②の場合は更に「父-母-子」の親子の組み合わせになる（性別あり）ものと、「単一神」としての組み合わせになる（性別なし）ものとに細分されることが主張された。

本発表では、この古代エジプトにおける「三柱神」について比較神話学の立場から検証し、その特殊性と普遍性を探ることを試みた。具体的には、古代エジプトにみられる三柱神を再確認・整理し、それらを「(古代

エジプトは) 前二千年紀に印欧語族との接触によって、聖性・戦闘性・豊饒性の三分区(三機能)イデオロギー、つまりトライアド構造を発生させた」とする比較神話学者 G. デュメジルの三機能説と照合した。以前より「三柱神」は新王国時代における神学上の発展形態とも見なされていたが、結果としては、既に古王国時代・中王国時代の葬祭文書・葬祭碑文にその存在を確認できる。そして、デュメジルの三機能説との比較においては、古代エジプトには日本やメソポタミアのような物語性の強い神話、体系的な神話が少なく、断片的な文字資料と図像を主たる資料とせざるを得ないことが三機能体系を確認する上での障害とはなるものの、数少ない神話に神々のエピソードや文字資料(讃歌や葬祭碑文 etc.)を加えて検証し、外来女神ケデシトを中心とした三柱神(新王国時代)について、レシェフ神とミン神と共に描かれる場合、アナト女神とアシュタルテ女神と共に描かれる場合のいずれもが、デュメジルの三機能説で説明可能であることを明らかにした。また、アメン神については、一柱の神に三機能全てが含まれる可能性があることを提示した。

今後は、新王国時代以前に出現しているものも含め、「父-母-子」型、「三女神群」型それぞれの三柱神について三機能説との照合を引き続き行ない、検証を深めたい。

10. 松岡美術館所蔵の木製人型棺について：制作年代と被葬者の家系をめぐる問題を中心に 藤井 信之

この発表では、東京の松岡美術館所蔵の木製人型棺を取り上げ、その制作年代と被葬者の家系について考察した。

この木製人型棺は第21王朝期のアクミムの神官のものとされていたが、一見してその年代はもっと下るものと思われた(現在では発表者の見解を容れてキャプションは変更されたと聞く)。中部エジプトのアクミムから出土したと考えられる棺については、先行研究として Brech, R. *Spätägyptische Särge aus Achmim*, Gladbeck, 2008 がある。そこでこの先行研究を手がかりに、棺の造形と意匠を検討することによって制作年代を割り出した。松岡美術館所蔵の木製人型棺は、棺の身が浅く、脚部基台が脚部より独立しつつあり、首を飾る襟飾り(?)が発達している。これらのことから、棺は前4世紀以降のもので、プトレマイオス朝初期にまで年代が下がり得るものと指摘した。しかしながら、棺のヒエログリフ碑文に見られる綴り字法やオシリス神のエピソード、描かれている神々の衣装にはプトレマイオス朝時代の特徴を認めることが出来ず、それらは伝統的な王朝時代のものであった。こうしたことから、この棺はやや幅を持たせて第30王朝からプトレマイオス朝初期にかけてのものと判断した。

被葬者の名はランケの人名辞典やデモティック人名辞典に収載されない極めて稀な名で、パシェリエンイルアァであった。棺の蓋には被葬者の父系を曾祖父まで遡る系譜が記されており、この系譜を既知のアクミムの神官系譜と照合した結果、フランスのギュメ美術館とアメリカのメトロポリタン美術館に血縁関係者のステラと棺が所蔵されていることが判明した。ギュメ美術館所蔵のステラとメトロポリタン美術館所蔵の棺に関する先行研究が提示する年代は、松岡美術館所蔵の棺に対する発表者の推定年代と一致していた。

以上から、松岡美術館所蔵の木製人型棺は、第30王朝からプトレマイオス朝初期にかけてのもので、ギュメ美術館所蔵のステラとメトロポリタン美術館所蔵の棺の主と血縁関係にあるアクミムの神官パシェリエンイルアァのものと結論した。

第2会場

1. 中東ネアンデルタール社会の人口変化：中期旧石器時代における文化進化をめぐる 西秋 良宏

ネアンデルタール人の文化進化の速度は現生人類のそれよりも遅かったという見方が一般的である。主たる根拠とされているのは、中期旧石器時代にはムステリアンを代表とする同一の石器インダストリーが広い地域

において長期にわたって展開していたのに対し、後期旧石器時代以降はオーリナシアンやグラベッティアンなど多彩な地域の石器インダストリーが短期間のうちに次々に継起したというヨーロッパ先史時代にかかわる編年的知見である。この見方が正しいのかどうかは慎重に検証すべきであるが、仮にそうであったとしても、それをもってネアンデルタール人と現生人類の生物学的側面、例えば創造力、認知能力の違いと結びつけるのは短絡的である。文化進化速度を規定する要因は他にも多くあることが知られているからである。

その有力な一つが集団サイズである。集団サイズと文化進化に相関があることは各地における歴史時代の事件や現代社会の諸集団、諸文化をみても了解できる。ヨーロッパを中心とした比較的寒冷な地域に生息し、かつ、体格が大きく肉食によるエネルギー摂取に依存していたネアンデルタール人社会の集団サイズは現生人類のそれよりも小さかったと見られている。小集団が分散する社会を営むより他なかった。であれば、このことが文化進化速度の見かけ上の鈍さにつながっていた可能性を想定しうる。ただし、それを検証するには、ネアンデルタール人社会にあっても何らかの事情で人口が増した場合には、現生人類と同様、文化進化の速度を増すことがあったかどうかを調べる必要がある。

本発表では、西アジア中期旧石器遺跡から得られる考古学的証拠、例えば、石器密度、炉跡密度、動物種など、集団サイズ、人口圧の指標になる変数を分析する。用いるのは、レヴァント地方北部のシリア、デデリエ洞窟、および中央アジア西部ウズベキスタン、アンギラク洞窟で筆者が集めたデータである。分析の結果、どちらの地域においても、中期旧石器時代の末頃（約7万年前以降）に集団、人口サイズが増大していることが示唆された。しかし、この時期に文化進化が加速化したという証拠はない。すなわち、この時期におけるネアンデルタール人の文化進化の停滞性は集団サイズが小さかったことに起因するのではなく、他の要因で説明されねばならないことが示唆される。

2. アラビア半島の遊牧化過程：ワディ・シャルマ1遺跡の調査から

足立 拓朗・藤井 純夫

金沢大学では、2012年度からサウジアラビア北西部タブーク州で、新石器時代から青銅器時代の遺跡調査を開始している。アラビア半島北部における遊牧拡散過程を追究することが目的である。2013年12月には、紅海沿岸に位置するワディ・シャルマ1遺跡 Area-1 の試掘調査を行った。

この遺跡は、以前の分布調査により先史時代に属すると報告されており、最近の我々の事前踏査でも後期新石器時代と想定していた。しかし、昨年末の試掘調査により先土器新石器B期（PPNB期）の小型集落であることが判明した。現在のところ、ワディ・シャルマ1遺跡はPPNB期の最南端遺跡であり、紅海沿岸までPPNB期の遺跡が分布することが明らかになったのである。出土したアムク型尖頭器や石皿、そして平面形を確認した矩形の大型複室住居跡などから、本遺跡はおそらくPPNB期の後期に位置づけられるであろう。

2014年9月には、本遺跡のArea-2において調査を実施し、PPNB期の住居跡を確認した。また、遺跡周辺の踏査を行い、円塔墓等の前期青銅器時代に属する遺構群を発見した。

本遺跡の調査成果が、サウジアラビアの新石器研究にとって新局面をもたらすことは確実である。しかし、そのためには調査・研究の進んだヨルダンの新石器文化研究との比較が肝要となる。金沢大学はこれまでヨルダン南部のジャフル盆地で新石器～青銅器時代研究を継続させてきた。その成果の一つであるジャフル編年の枠組みにワディ・シャルマ1遺跡を対応させることが可能である。また、金沢大学はサウジアラビア北西部においてアル・アイーナ遺跡やキルワ遺跡といった他のPPNB期の遺跡踏査も開始しており、ヨルダン南部からサウジアラビア北西部にまたがる広域の編年整備が期待される。

これにより、アラビア半島北部の新石器時代がレヴァント南部の新石器文化圏に組み込まれていた可能性を指摘できる。遊牧化過程もこのことと連動させて追究していかなければならない。

3. 紀元前5千年紀イラン南西部、鈍黄色黒彩土器の展開：タル・イ・バクーン A, B 遺跡出土土器を事例として 三木 健裕

紀元前5千年紀のおよそ1,000年間、イラン南西部ファールス地方では、鈍黄色黒彩土器（black-on-buff ceramics）を示標とする物質文化が、バクーン文化として展開した。発表者はかつてこの鈍黄色黒彩土器の文化が前5千年紀初頭に、当該地方でどのように受容されたかを論じた（三木 2014）。それに続くかたちで今回の発表の目的を鈍黄色黒彩土器が当該地方で展開していくプロセスを探ることとし、タル・イ・バクーン A, B 遺跡出土土器（東京大学総合研究博物館所蔵、それぞれバクーン後期、前期）を中心的な事例として扱った。発掘者である江上波夫と増田精一は、バクーン A, B 遺跡出土土器の報告を行っている（江上・増田 1962）。彼らは土器の分類を行ったが、その組成を定量的に検討していなかった。また今までの先行研究では、鈍黄色黒彩土器が展開する中で、その製作技術にどれだけの変化があったのかを捉えた研究はみられない。今回バクーン A 遺跡出土土器1,924点、バクーン B 遺跡出土土器341点を分析した。あわせて発表者が以前調査したタル・イ・ジャリ A 遺跡（バクーン前期）、タル・イ・ギャブ遺跡（バクーン中期）の土器と比較し、1,000年間にわたる通時の変化を探った。その結果、第一に土器組成中の鈍黄色黒彩土器の割合が増加することが確認され、鈍黄色黒彩土器の生産量が増加することが示唆された。かつ生産量の増加に比例して、社会内で鈍黄色黒彩土器の価値が変動していた可能性も示唆される。第二に、鈍黄色黒彩土器の底部高台の形態が大きく変化する様子も観察された。その変化の背景には成形技法の違い、及び回転台利用が関係していることが示唆される。バクーン前期には粘土紐を底部に貼付けて低速回転台で整形する技法、および底部を薄くならして高台を作り出す技法が用いられていた。一方バクーン後期になると、底部を薄くならして高台を作り出す技法はみられなくなり、粘土紐を貼付けて高速度の回転台を用いて整形する技法が見られ始める。以上鈍黄色黒彩土器生産の本格化と回転台利用という効率的技法の採用が連動してみられることは、専門化に向けた動きと評価しうる。

4. 銅生産拠点後背地の土地利用：ヨルダン南部ショウバック北地域の前期青銅器文化 山藤 正敏

本発表は、ヨルダン南部ショウバック北地域の前期青銅器時代 III 期後半（前2500～2300年）における利用意義について、西隣アラバ渓谷内の銅生産拠点フェイナン地域との関係性から考察した。

ショウバック北地域では、2010～2013年に実施された遺跡踏査により41地点において前期青銅器時代（EB 期）の痕跡が認められた。このうち、16遺跡が確認された EB III 期後半には、元来は数件の住居から成る比較的定住的な村落であったと考えられる、レパートリーの豊富な多量の土器片を伴う数地点が含まれる。これらの採集土器はフェイナン地域出土土器と型式学的に類似する。

周辺地域の様相を見ると、時期を追うごとに EB 期の痕跡が減少するが、EB III 期後半以降ではフェイナン地域を含む西側死海地溝帯内でのみ一定数の遺跡が認められ、ショウバック北地域における当該期の痕跡が西方起源であることを裏付けている。

EB III 期後半は、フェイナン地域のヒルベト・ハムラ・イフダン遺跡における銅生産がピークを迎える時期である。そこで、周囲に比べて降雨が多く（年間平均 300mm）、天水農耕がほぼ唯一可能なショウバック北地域への進出はフェイナン地域の居住人口を賄う穀物生産のためであったと仮定し、各地域の居住人口推計とショウバック北地域におけるコムギ生産量の推計を行った。結果として、ヒルベト・ハムラ・イフダン遺跡のピーク時の推計人口234人に対して、ショウバック北地域で生産可能な穀物は最大で年間 54.3t であった。25%のコムギが何らかの事情（翌年の播種用及び食害等）で消費不可能だと仮定すると、一人当たりの年間消費量 200kg で考えた場合、上記の収穫量でヒルベト・ハムラ・イフダン遺跡の全人口を賄えないことが判った。同遺跡から出土した獣骨の分析に依れば、ウシの大量消費とヤギ・ヒツジの放牧活動が判明しているので、カ

ロリーの不足分は動物由来のタンパク源（1次及び2次）により補われうる。あるいは、ロバの骨の出土や銅製品・インゴットの他地域への拡散に鑑みて、交易により外部から食料が持ち込まれていた可能性も否定できない。いずれにせよ、本分析のカロリー不足分への対応方法あるいは広く食料確保方法全体はフェイナン地域における銅生産活動の周辺「都市」からの独立性の問題と関わっており、今後慎重に検証を続けるべきであろう。

5. 北レヴァント地方鉄器時代の Cooking Pot Ware：沿岸部と内陸部の変遷

西山 伸一

北レヴァント地方鉄器時代（前12世紀～前6世紀半）の土器に Cooking Pot Ware（調理用土器：以下 CPW）と呼ばれるグループがある。この土器は、これまで型式分類を含め詳細な研究がほとんど実施されてこなかった。しかし、近年になって急速に鉄器時代研究者たちの関心を集めている。その理由は、この土器がキプロス島やエーゲ海文化の影響のもとに出現したものとし、上記の地域からレヴァント地方への「移民」さえ示唆する主張がなされるようになったからである。近年では、バーニー（K. Birney）による Band-handled Cooking Pot（以下 BHCP）の研究（2008年）がこれを代表するものであるが、それ以降も CPW をテーマとしたシンポジウムやワークショップが開催されている。

本発表では北シリア内陸部に位置する Tell Mastuma と南東トルコ沿岸部に位置する Sabuniye から出土した未刊行資料を含む CPW を分析し、鉄器時代Ⅰ期からⅡ期にかけて内陸部と沿岸部でどのような型式、胎土の変遷があったのかを検討した。その結果、レヴァント地方の内陸部と沿岸部ではバーニーが BHCP と呼ぶ型式よりも多様な形態が存在し、CPW のバリエーションとその変遷はより複雑な様相を呈することが明らかとなった。さらに Tell Mastuma の事例から胎土について少なくとも2種類あり、口縁部が「外折（Outside-folded）」か「内折（Inside-folded）」である点が鉄器時代Ⅰ期からⅡ期への形態変化の一つの要素として使用できることを指摘した。

CPW は「食文化」というある意味保守的な文化を示す遺物であり、「移民」を示唆する要素も含んでいることは事実である。しかし、CPW については整形方法、胎土、器形などの時期毎の変遷やその理由についても十分明らかにされているとはいえない。このため、BHCP を「移民」の証拠の一つに数えるにはまだ多くの障壁があると主張した。

結論として以下のことが指摘できる。1) CPW は、沿岸部と内陸部で共通する型式もあるが、異なる型式も存在する。その型式や変遷にはより複雑な様相を呈する。2) BHCP の出現と拡散はキプロス島やエーゲ海方面からの影響だけで説明することはできない。似たような形態の CPW は内陸部において後期青銅器時代Ⅱ期から出現しており、特定の CPW の拡散を「人間の移動」に安易に結びつけることは危険である。3) 北レヴァント地方の鉄器時代は、さまざまな方面からの文化影響が遺物に見られる時代であり、そのことを十分認識して CPW の研究を進めるべきである。

6. 3～7世紀のメソポタミア出土ガラスに関する考察

四角 隆二

3～7世紀のメソポタミア出土ガラスは、19世紀半ばから20世紀前半にかけて行われた欧米隊の調査によって得られたもので、大英博物館をはじめとする欧米の大学／研究機関など所蔵先が限られている。概報からは出土ガラスの器種組成は把握できるものの、調査年代が古く、層位的な変遷など実態は明確ではない。一方、発表者が勤務する岡山市立オリент美術館を含め世界各地の博物館に所蔵されている伝イラン出土ガラス容器は完形品で美術的逸品が知られるが、出土遺跡や層位、供伴遺物などの考古学研究に必要な情報を失っている。これまで発表者は東京理科大学中井泉研究室との共同研究の中で、伝イラン出土容器に含まれる地中海系

ガラスの存在の確認と、地中海系ガラス容器に対するサーサーン朝領域内での二次加工の実態を明らかにしてきた。

本発表では大英博物館に所蔵される、3～7世紀のメソポタミア都市遺跡出土ガラスを分析対象とし、伝イラン出土博物館資料との比較を試みた。資料化した大英博物館所蔵ガラスは約100点、これらは層位や供伴遺物などの情報は失われているため、メソポタミア都市遺跡出土資料として一括で扱った。対して、伝イラン出土資料として取り上げたのは大原美術館所蔵品15点である。大原美術館所蔵は1959-60年にかけて水野清一京都大学教授がテヘランで蒐集したもので国内博物館資料としては資料性が高い。

分析の結果、メソポタミア都市遺跡由来資料は壺など貯蔵器形が多く見られる一方、伝イラン出土品は飲用器など特定の器種に偏りが見られた。後者については古墓出土とされていることから葬送儀礼との関係が想定された。

3世紀後半以降、ユーフラテス川以東において吹きガラス生産が本格化する。大英博物館所蔵資料からは日用品と見られる小型素文の瓶／壺から、カットや型吹きなど装飾性の高い碗形／鉢形容器まで幅広い器種が生産されていたことは明らかである。にもかかわらず、3～7世紀のメソポタミアやイランへ地中海方面からのガラス容器の流入は継続していた。反対にユーフラテス川以西ではサーサーン・ガラスの出土報告は知られていない。こうしたガラス容器の一方通行の移動の背景に、オリーブオイルやワインなど内容物の移動との関連を想定した。

7. サーサーン式銀貨における後刻印の再分類

津村眞輝子

6-8世紀のサーサーン式銀貨（サーサーン朝ペルシア銀貨およびアラブ・サーサーン銀貨）の多くに、約1cmの小さな極印がコインの上から打刻されている。この後刻印（カウンターマーク）については、ウォーカー J. Walker（1941年）、ゲーブル R. Göble（1967年）、ガウベ H. Gaube（1973年）らが、主に図柄をもとに詳細に分類し、図柄の種類として動物、人の顔、文字、紋章などをあげている。これらは、サーサーン朝末からイスラーム初期にその勢力の東側、つまり北東イラン、中央アジア、アフガニスタン、北インド方面で刻印されたと推測されている。しかし刻印者、地域、時代について未だ説明されていないことも多い。上述の研究以後、特定の後刻印の研究はあるが、全体的研究は殆どない。新種も報告されており、再検討が必要となっている。

発表者は現在、再分類すべく後刻印のデータを収集している。分類の新要素として提唱しているのが「擦痕」である。後刻印が押されたコインの裏面には、往々にして幅3-5mm、長さ1-2cmの傷が認められる。かつて発表者は、擦痕が後刻印の種類と関係することを、新疆ウイグル自治区出土一括コインのデータを用いて論証し、本学会誌で発表した。その観点から国内外の美術館等に所蔵されているサーサーン式銀貨の後刻印を調査しており、本発表はその途中報告である。例えば、図柄としては同類の霊鳥シムルグ（または有翼ラクダ）でも、擦痕が有るものと無いものとに分けられる。また、エフタルの紋章を示す後刻印には擦痕が有り、7世紀末にアフガニスタン北部で刻印されたバクトリア語銘の後刻印に擦痕は無いなど、発行者をある程度特定できる後刻印のデータも集まってきた。本報告では、以上のように擦痕の有無が、従来の図柄でのアプローチとは違う角度からの分類を可能にすることを提示した。

当時の後刻印は、主にサーサーン式銀貨を自国貨幣として代用する手段であったと考えている。それはサーサーン式銀貨の信用度の高さを示すとともに、刻印する側の脆弱さを示す。したがって、後刻印の刻印者、地域、時代を解明していくことは、サーサーン式銀貨の周辺諸国での利用のされ方の実態に迫ると同時に、後刻印を押す側の政治背景や勢力範囲を知る手がかりにもなるはずである。それが本研究の最終目的であるが、さ

らなるデータの収集と詳細な分析が必要である。

8. オリентから見た「オリент」：1958-1989年の「ペルシア三彩」蒐集を事例に

神田 惟

本発表の目的は、正倉院御物の公開を契機とした、戦後の、所謂シルクロードブームを背景に収集された西アジア美術品の取り扱いに関する問題提起を行うことである。特に、釉薬の色の組み合わせが中国の唐三彩と類似することから国内において「ペルシア三彩」の愛称で親しまれてきたタイプのイスラーム陶器の蒐集史について論じる。

「ペルシア三彩」は、我が国において最も展示され、出版され、研究され、蒐集されてきたタイプのイスラーム陶器である。このタイプの陶器は、東洋学者三上次男の著作や、古美術商「三日月」の石黒孝次郎が都内で開催した展覧会を通じ、1950年代後半から日本人コレクターの知るところとなり、以降約30年間にわたり、好んで国内の公／私コレクションに収められた。その総数は、公開されている作例に限定してみても、132点にも及び、これは、世界中の伝ニーシャープール製「ペルシア三彩」コレクションの約3/4を占める。

しかしながら、その全てが、美術市場を通じて収集された「美術品」であり、来歴は定かではない。これまで多くの和書において、「ペルシア三彩」の制作地はイラン北東部に位置するニーシャープール、製作年代は9-10世紀と同定されてきたが、実際にそうであると言えるものはどの程度含まれているのか？ 報告者はまず、アメリカ隊の学術的発掘によって報告された来歴が確実な9-10世紀のニーシャープール出土の多彩釉刻線文陶器（イラン考古博物館およびメトロポリタン美術館所蔵）を、線刻モチーフ、釉薬の施され方、焼成の向き、器形に着目して分類し、総合的なグループ化を行い、その鑑定基準を確立した。これを礎とし、美術市場経由でもたらされた国内外の伝ニーシャープール製「ペルシア三彩」を対象とし鑑定を行ったところ、確実にニーシャープール製であると言える作例は全体の約半数に過ぎない、という結果を得た。

では、なぜ、1950年代後半以降の日本において、「ペルシア三彩」に対する需要が発生し、それが拡大したのか？ 報告者は、国内で「ペルシア三彩」が受け入れられた文化的土壌を、「三彩」というディスコース（学術的趣向）と、「民芸」というテイスト（物質的趣向）の観点から分析した。そして、これら双方の点で日本人の趣向に合致したことが、世界に類を見ない「ペルシア三彩」ブームの要因となったことを明らかにした。

この事例は、日本人のオリент観形成というより大きな問題に一石を投じるものである。今後は、シルクロードブームというコンテクストを踏まえた上で、日本における西アジア物質文化受容の問題を再検討すべきである。

第3会場

1. マリ王国の情報伝達におけるシャーピトゥムの役割

櫻井絵美夏

今回の発表では、ジムリ・リム時代の地方長官であるシャーピトゥムの職務のうち、情報提供者としての側面を考察した。シャーピトゥムが職務として対応していた情報は、誰がどこからやって来たのかという、地区に入ってくる者たちの情報と、他国の動向であったと思われる。

前者の場合は、単に誰がどこから来たのか知らせるだけではなく、ときにはやって来た者をすぐには先へ通過させず、シャーピトゥムの判断で留め置き、通すか否かの判断を王におおぐ場合もあった。シャーピトゥムは地区にやって来た者に対して主体的に判断し行動しているといえよう。後者においては、シャーピトゥムが担当している地区によって対応に違いが見られる。マリ地区のシャーピトゥムであるバフディ・リムは、早くバビロンの情報を自分のもとへ送るようマリの官吏に催促して、バビロンの情報を集めようとしている。またカトゥナン地区のザキラ・ハンムも、メルフムに情報を送ってくれるよう頼んだり、ザキラ・ハンム自らがア

ンダリクへ赴き、アンダリク王カルニ・リムの動向を伝えたりしている。一方、テルカ地区のキブリ・ダガンやサガラトゥム地区のヤキム・アッドゥは、情報収集に対してあまり積極的な行動はしていない。これらの両地区に関しては、ほとんど地区にやってくる使者をはじめとした者たちから聞いた話を王に伝えているだけである。情報収集という職務に関しては、カトゥナン地区のシャーピトゥムが北方や東方のイダマラツ地方やヌムハ・ヤムトバル地方を担い、南のパビロン方面の情報収集はマリ地区のシャーピトゥムが担うと、ある程度役割分担があったのではないだろうか。

最後に、シャーピトゥムが王に送った情報のうち、神意について検討した。神意のうち、内臓占いの結果に対しては、占いの結果に従い大麦の刈り入れを行うなど、シャーピトゥムは主体的に行動しているといえよう。しかしここで重要なのは、占いの結果自体ではなく、シャーピトゥムがきちんと業務を果たしているということであり、王に伝えたいのは占いの結果ではない。そして預言や夢の報告に関しては、その内容に対して何か行動をとるといことはしていない。シャーピトゥムの職務は、あくまで地区の平穏を保つことであり、預言や夢の内容を判断し、対処する権限はシャーピトゥムにはなかったのだと考えられる。

2. 特殊な「世話」契約としての *RE 6*

山田 雅道

エマル文書 *RE 6* は、ダディ夫妻が娘イムト・ダバリをウギヌの「嫁」(3行)、すなわち彼の息子の妻として嫁がせた結婚契約書である。テキストの保存状態は必ずしも良好ではないが、この文書に関しては従来二つの特徴が指摘されてきた。第一に、列挙された各種財産(9-15行)が花嫁側の持参財の目録であること。第二に、イムト・ダバリがウギヌの「娘」(23行)とも呼ばれている点に留意して、この契約を、ウギヌが彼女の結婚相手として自分の息子が他者かを選択できる「結婚養女縁組」(matrimonial adoption)と見なすこと、である。しかし25-26行を読む限り、彼の息子が結婚相手であることは確実と思われ、第二点は成立しない。また第一点に関しても、上記「持参財」と22行に言及されるウギヌの「相続財産」(HA. LA)との関係が十分に説明できないという難点が指摘される。

発表者の理解によると、*RE 6* の実質的な主題はウギヌ夫妻の老後の「世話」である。ただし通常であればこの義務は彼の息子が負うべきところ、ここでは彼の嫁イムト・ダバリに課されている(4-5行)点が注目される。他方、ウギヌの相続財産に関して、彼の兄弟たちがイムト・ダバリに対する権利請求を禁じられている事実(22-24行)は、この財産が彼女に贈与されたことを強く示唆する。「世話」契約としては異常なこれら二つの特徴は、相関すると見なすのが妥当であろう。すなわち発表者は、イムト・ダバリが舅夫妻を世話する義務を負う代償として、彼女は舅の相続財産を受け取ったと考える。そしてその細目を示したものが、9-15行の財産目録であると理解したい。これを換言すれば、*RE 6* においては同じ財産贈与の記事が反復されている(9-17, 21-22行)ということである。こうした二つの並行記事の存在は、「父と母」の任命文書3点に見られるごとく、それぞれにおける力点の相違(贈与の事実[内容] vs. その自発性)によって説明される。

夫(おそらく非健常者であろう)に代わって舅夫妻の「世話」を引き受け、舅の相続財産を受け取る女性イムト・ダバリの姿は、むしろ養親と対等な立場で契約を結び、その娘と結婚し、その家産の相続者となった養子を彷彿とさせる。その意味において *RE 6* は、このような養子縁組のジェンダー転換版と見なすことができよう。

3. 「エサルハドン王位継承誓約文書」の構成と儀礼

渡辺 和子

紀元前672年に大量に作成された「エサルハドン王位継承誓約文書」(Esarhaddon's Succession Oath Documents=ESOD)は主としてニムルド版(Wiseman, *Iraq* 20, 1958; Watanabe, BaM Beiheft 3, 1987 参照)

によって知られていたが、2009年にトルコのテル・タイナトで発見されたタイナト版が2012年に公刊されたこと（Lauinger, JCS 64, 2012 参照）によって、いくつかのことが明らかになった。なかでも ESOD の § 35 (ll. 397-409) の欠損部分がタイナト版によって補完されたことにより、ESOD の構成が（1）印章の説明、（2）表題、（3）命令、（4）制定事項、（5）条件節（違約の場合）、（6）関係節（違約の場合）、（7）帰結文（呪い）、（8）第 1 人称の誓約、（9）奥付の 9 つの要素から成ることが確定したことは大きな収穫である。§ 35 は（6）にあたるが、例外的にバビロニア語風の言い回しで書かれた部分であり、内容的に極めて重要な部分を含むが（Watanabe, *Orient* 49, 2014 参照）、形式上は不要な要素である。

ESOD の中核は誓約であり、（3）と（4）によってエサルハドン側から誓約の内容が提示され、（8）の誓約の言葉を個々の誓約者が唱えるという 3 つの要素から構成される。そして、誓約違反となる場合を示す条件節（5）があり、続く帰結文（7）によって罰則としての呪いの言葉が記される。特に条件節の分量が多いために、それが ESOD の中核であるかのような解釈もあったが、ESOD は実際のところ、守るべき事柄が提示され、それを守らない場合の罰則が記されるという通常の法的文書の形式に従って書かれた誓約文書である。

しかし誓約が有効とされるためには、誓約の言葉を唱えるだけではなく、何らかの誓約儀礼が伴っていたはずである。エサルハドンの王碑文のなかに「私の王権を守るために偉大な神々の誓い、アデー (*adē māmīt ilāni rabūti*) を水と油によって誓ったアッシリアの人々」（Leichty, RINAP 4, 2011, 13, 50-51）とある。これは、センナケリブが息子エサルハドンをアッシリア王位継承者と定め、その順守をアッシリアの人々に誓約させた儀礼において、誓約者は誓約の言葉を唱えると同時に水と油をそれぞれ飲む、皮膚に擦り込むことによって体内に入れ、誓約に違反した場合に体内の水と油が呪いの力として働いて、自らの命が危うくなることを覚悟するものであったと考えられる。ESOD 本文は、ESOD のための誓約儀礼について言及していないが、違反にあたる場合として挙げている、ESOD への対抗誓約儀礼の具体例から ESOD にも、水と油を用いるような誓約儀礼が伴っていたことが推測できる。

4. ヒッタイト語における「結びつき」とイシュヒウル文書

山本 孟

ヒッタイトの外交において、条約締結と王室間結婚は大国の支配者との同盟関係および属国の支配者との主従関係を構築するための重要な外交政策であった。このことから、条約と結婚はヒッタイトの人々にとって新たな人間関係を築く上で最も基本的な結びつきであったと考えられる。

本発表では、この二つの結びつきの概念を捉えるために、ヒッタイト語の動詞 *išhiya*-「縛る」とその類義語 *hamenk*-「結ぶ」の用法を考察し、両者を比較した。「条約」あるいは王から臣下への「指示文書」と訳されるイシュヒウル (*išhiul*-) という名詞は *išhiya*- の派生語であることから、この動詞の用法を分析することは条約の性質を理解する上で不可欠である。また *hamenk*- は *išhiya*- の類義語であるだけでなく「婚約すること」を意味する語であることから王室間結婚の理解に示唆を与えてくれるものであると考えられた。本発表の目的は、これらの動詞の用法の分析を通じてヒッタイトの人々が条約と婚約による関係性をいかに認識していたかを明らかにすることであった。

その結果、*išhiya*- と *hamenk*- という動詞がそれぞれ比喩的に表している人間関係はヒッタイトの外交政策を象徴していることが明らかとなった。文小辞 *-šan* あるいは *-kan* を伴った *išhiya*- は、逐語的には「物を別の物に縛りつける」ことを、比喩的には「負担を人に課す」ことを意味する。そこから派生する名詞 *išhiul*- は、文字通り言えば「負担を人に課すもの」である。すなわち、「条約」とは課す側と課される側の上下関係を前提に発行される、負担を明文化した文書といえるのである。その結びつきとは、義務に縛り付けられた人が自らの意思で逃れることはできないような束縛である。一方で *hamenk*- は、「離れた二つの対象をつなぐ」こと

を意味し、「男女をつなぐ」ことに使用された場合に「婚約」と訳される。このことから、結婚という結びつき、少なくとも婚約自体に強制的な含意はない。そうであれば、王室間結婚も王室間の合意を下に成立する、変更可能な非強制的な関係であったと言えるのかもしれない。このように、ヒッタイトの外交政策においては、条約によって縦の関係を築き、結婚によって横の関係をつなぐことという二重の結びつきが重視されていたと考えられる。

5. エジプト語 sdm-f 活用への通言語的アプローチ

吉野 宏志

本発表はエジプト語の sdm-f 活用の起源と発達について、「属格主語」「副動詞」「状態動詞」という三つの類型論的な観点から分析を行った。エジプト語研究では sdm-f 活用の起源として、Erman (1901) が提示し、Sethe (1910; 1918) と Gardiner (1957) が発展させた分詞起源説が最も有力な仮説として共通認識になっている（あるいは起源について深く議論していない）。本発表の分析結果は、全く異なる観点から行なわれたにも拘らず、分詞起源説との整合性が非常に高いことから、有力な仮説であると（改めて）認識されるべきである。

属格主語は主語標示を所有表現で実現するという言語現象で、系統や地域に拘らず世界の諸言語で確認されていることを、上代日本語、フィンランド語、ダゴール語を例に挙げて示した。

副動詞は、Ebert (2008) の定義に従えば、主動詞に対して従位接続するため副詞節として現れるが、エチオピアの諸言語においては必ずしもそうなるわけではなく、主動詞の行為に連続する行為（または関連のある行為）を表すため、連位接続 (Van Valin 1984) を示すこともできることも知られている。またエチオピアの諸言語のうち、アムハラ語では副動詞の主語標示として属格主語を用いることを示した。

状態動詞は状態や状況を表す自動詞であり、言語や研究者によっては形容詞として認識される場合がある。エチオピアを中心に北東アフリカに分布する東クシ語群には状態動詞のみに適用される動詞活用が存在し、その内の一つであるサホ語では所有代名詞と酷似した接尾辞が用いられている（無標の三人称単数と複数標示のみの三人称複数を除く）(Banti 2001)。また日本語でも状態動詞を関係節で用いる場合に主語を属格によって示す。これらのことから、状態動詞と属格主語の親和性が高いと考えられる。

エジプト語 sdm-f 活用はこれら三つの要素を兼ね備えていると考えられるが、特に接尾辞 *-Vn(n)* によって過去時制形を派生する東クシ語群の状態動詞活用との類似が指摘できる。東クシ語の状態動詞のように「形容詞的」な性質を持つ分詞が sdm-f 活用の起源として有力であると考えられる。

Banti, G 2001: "New Perspectives on the Cushitic Verbal System," *BLS* 27S, 1-48.

Ebert, K. H. 2008: "Forms and Functions of Converbs," in K. H. Ebert et al. (eds.), *From Siberia to Ethiopia*, Zürich: Universität Zürich, 7-33.

Erman, A. 1901: "Zur Entstehung der jüngeren Flexion des Verbums," *ZASA* 39, 123-128.

Gardiner, A. 1957: *Egyptian Grammar*, 3rd and revised ed., Griffith Institute.

Sethe, K. 1910: "Über einige sekundäre Verben im Koptischen," *ZASA* 47, 136-146.

Sethe, K. 1918: "Zum partizipialen Ursprung der Suffixkonjugation," *ZASA* 54, 98-103.

Van Valin, R. D., Jr. 1984: "A Typology of Syntactic Relations in Clause Linkage," *BLS* 10, 542-558.

6. デモティックにおける第2時制の文焦点化機能

小山 彰

発表者はこれまでに、新エジプト語の *i. sdm=f* 構文ならびにコプト語サイド方言の第2時制（別名：焦点化転換）が文焦点化、すなわち文の意味内容全体を焦点化する機能を有していること、そしてその機能により

これらの構文が文脈に応じて多様な解釈を産出することを論じた（『オリエント』54/1（2011）；56/2（2013））。そのような経緯を背景として本発表では、新エジプト語、コプト語とともに後期エジプト語（Later Egyptian）に区分され、さらに通時的に両者の中間に位置づけられるデモティックの第2時制（*i-ir=f sdm*）について、同様の観点から検討を行った。

デモティックの古典的な文法書である W. Spiegelberg, *Demotische Grammatik*, Heidelberg, 1925 では第2時制の主節における用法として、命令の用法（§ 179）、語りの用法（§ 181）、および格言的用法（§ 182）が挙げられている。しかしポロツキーによるコプト語の第2時制の研究（H. J. Polotsky, *Études de syntaxe copte*, Le Caire, 1944）が発表されるとその内容がデモティックの分析に反映され、当該期の第2時制の機能もまた、主として副詞類の焦点化にあると理解されるようになった。

しかしながらその用例を仔細に検討してみると、上述の副詞類焦点化機能の適用では対応が困難であると判断され、むしろ文焦点化機能の存在を予見させる事例が認められる。そこで本発表では、「デモティックにおける第2時制は副詞類の焦点化のみならず、文全体の焦点化という機能的側面も併せ持っている」という仮説を提示し、その例証を試みた。具体的にはプトレマイオス期のデモティック・テキストを検討対象とし、かつてシュピーゲルベルグが挙げていた3つの用法に対応する「指令・規定」、「格言」、「語り」の用法について特に取り上げて検証を行い、それらが総じて文焦点化機能に結びつけられることを確認した。そしてこの結果から後期エジプト語の第2時制は、新エジプト語からデモティックへ移行する通時的な過程において文焦点化機能への拡張が進んだものと結論づけた。

7. 古代スーダンにおける「鉄」の象徴性について

関廣 尚世

第55回大会では、「古代スーダンにおける鉄器使用と製作技術試論」と題し、発表を行った。この中で、メロエ期（紀元前3世紀－紀元4世紀半ば）とポストメロエ期（4世紀半ば－6世紀半ば）の鉄器製作技術研究について、①製鉄炉の構造、②鉄器製作関連遺物の形式分類、③スラグの理化学分析、④鉄器の理化学分析、⑤鉄器の宗教的側面の視点を提示し、①～④について論じた。

このため本発表では、⑤鉄器の宗教的側面に焦点をあてる。また、鉄器の宗教的側面については先行研究から、鉄とスーダン固有の神アブデマクとの関係性や、古代スーダンの神話体系への古代エジプト神話体系の援用に焦点を当て、これらを鉄の象徴性と読み替えて論を進めた。

すでに19世紀初めには、古代スーダンにもライオン神が存在するということがわかっていた。ただし、その神の名が明らかになるのは、1909-10年に J. ガースタング（Garstang）がメロエでライオン神殿を発掘調査し、ライオン神の姿が描かれた赤色粘板岩製の碑文が発見された時である。これまでの研究で、同神は、戦士の姿を取り、オシリス神の代替として描かれ、創造神の役割を担い、そして「鉄」との関連性が指摘されてきた。

主たるライオン神殿はムサウワラート・エッ・スフラ、バサ、ナカ、メロエの各遺跡に位置する。メロエのライオン神殿は鉄滓マウンド上に建っており、アブデマク神と鉄との相関関係を直接的に示す根拠の一つとなっている。また、ナカのライオン神殿では、アブデマク神はライオンの頭を持つ戦士の姿以外に、顔が3つ腕4本の姿と、顔がライオンで身体が蛇の姿でも描かれている。このアブデマク神の特異な姿は、これまでもインドないしヒンドゥ美術様式からの影響が指摘されており、同神の成立に多様な文化背景があったことをうかがわせる。

メロエで出土した鉄製品についても検討を加えた。鉄製品は、武器・利器・装身具・祭祀具などに大別でき、その出土状況は、鉄ないし製鉄をタブー視し、一般社会から隔離するような概念が存在したことを示していない。むしろ、銅や青銅製品と共存関係にあったと考えられ、そうした点でも古代エジプト社会とは少し異なる

様相を呈する。

以上の点から、古代スーダンの「鉄」の象徴性とは王権や権力であり、また古代スーダン文化成立背景の多様さに求められると考えられる。

8. 出土コインからみたウム・カイス遺跡の歴史の変遷

江添 誠

国士舘大学イラク古代文化研究所文化遺産研究プロジェクトによるヨルダン・ハシミテ王国ウム・カイス遺跡の発掘調査は2014年で10期を迎え、岩盤まで到達する調査地区も出てきたこともあり、遺跡の層位を分析することが可能な状況になりつつある。調査地区は都市の中心を東西に走る大通りであるデクマヌス・マキシムスの北側部分で、初期ローマ時代のものと考えられている市壁の内側にあり、ヘレニズム時代後期からウマイヤ時代までの遺構が検出されている。調査地区のセクションでは表層のモザイク床を含め、いくつかの層位を捉えることができる。

ウム・カイスはヤルムーク川の南側の急勾配な斜面を登ったヨルダン台地の北西端に位置しており、古代ではガダラと呼ばれ、イエス・キリストが悪霊祓いの奇跡を行った町としてその名が知られている。

国士舘大学の調査地区で見つかった出土コインは総数で1,200枚を越えている。そのうち銘や図像から年代を明確に読み取ることが可能なコインは155枚である。これらのうち、ウム・カイスのローマ化の初期段階と言われている前1世紀のコインは2枚出土しているが、これらはいずれも石積みの工法などから前63年のポンペイウスの東方遠征における都市の再建の痕跡ではないかと考えられていた壁面に連続する玄武岩製の床面から検出されており、遺跡の初期段階の層位を確定する根拠となる可能性が高い。

次にウム・カイス周辺のガリラヤ湖南東岸地域とトランスヨルダン地域に位置するヒッポスとペラの発掘報告書から出土コインのデータを抽出し、年代分布を比較してみた。結果、3遺跡ともにコンスタンティヌス朝期（306～63年）のものが最も数が多く、次いでテオドシウス朝期（379～457年）のものがくることが判明した。ヒッポスとペラではさらにユスティニアヌス朝期（518～602年）も数が増加するが、ウム・カイスではレオ1世の治世のコイン（457～74年）を最後にビザンティン時代のコインは検出されていない。さらにウマイヤ時代のコインについては僅かに1枚しか確認されていない。このことはウム・カイスが5世紀半ばに貨幣による経済活動が行われなくなり、都市そのものが衰退に向かっていった可能性を示唆するものとなっている。

今後は日本隊調査地区のみならず、他の発掘区から出土したコインもデータに加えられるよう関係機関に要請し、ウム・カイス遺跡全体の状況を捉えていきたい。

9. エジプト西方デルタ・イドゥク湖南域の考古学調査：コーム・アル＝ディバーウ遺跡表層の生活痕跡を読み解く

長谷川 奏

私たち研究班（早稲田大学を中心とした科研費調査研究班）の研究対象地域であるブハイラ県のイドゥク湖のほとりは、伝統的な低湿地である。従来のアレクサンドリア古典考古学では、アレクサンドリア自体の都市構造の探求や、アレクサンドリアと西方デルタの緑地帯の流通あるいは西方砂漠との繋がり等の研究に重点が置かれてきたために、低地での人々の暮らしぶりの解明は学史に新しい光を投げかけるであろう。当該地域では前6～5千年紀の海進後に塩基性土壌が残されたために、灌漑が困難な地となった一方で、ここには多くのヘレニズム遺跡が分布している。その歴史的背景を追求するために、研究班はイドゥク湖の湖面範囲の復元と古砂丘堆積の復元に関する考察を進めてきた。そこである時は海洋と繋がりあるいは切り離される変動に揺さぶられ、かつ砂丘という脆弱な生活基盤での遺跡テリトリーに焦点が当てられた。当地は、北から南にかけて地中海～砂丘～海水塩分の高い湖～淡水の湖～緑地と環境の差異が大きく、東西では平坦な低地がデルタの端

から端まで続いている。そこで、人々は脆弱な生業複合に依拠しながらも、環境を生かした活発な経済活動を営み、ひとたび出来上がった文化の形はデルタの東西に広範に広がっていったと推測された。

本発表では、上記の仮説の具体的な検証事例として選定した、コム・アル＝ディバーウ遺跡の地表面探査の成果を報じる。当該遺跡は、古砂丘の上に形成された集落遺跡であり、学史の上では未調査の遺跡である。研究班は2014年9月に、微地形測量の後に探査機材を用いて分布調査を行った。磁気探査では、西斜面に広がる日乾煉瓦で建造された集落址と思われる極めて明瞭な分布の反応が得られた。地表面の遺物の所見を合わせると、この集落がローマ時代（後1～3世紀）に繁栄期を迎えていたことを推測させる。一方、GPR探査の結果では、集落南側の麓において、焼成煉瓦建造物が分布している可能性が得られた。また遺構観察からは、丘の頂部にナオスをもつ神殿の壁体が検出され、その煉瓦規格（36-38cmL）から、当面プトレマイオス王朝時代の建造による可能性を視野に入れることができた。これらの結果を総じて、南丘陵全体ではヘレニズム時代からビザンツ時代までの時代層が重層的に折り重なっている可能性が得られ、次年度の発掘調査でより詳細な生活文化資料が得られることは確実と考えられる。

第4会場

1. セレウコス朝およびアルシヤク朝時代のバビロンにおける「市民」とその組織

三津間康幸

本発表の目的は、セレウコス朝、アルシヤク朝がバビロンを支配した時代（それぞれ前305/04-141/40年、前141/40-後224年）の出来事を記録するアッカド語楔形文字文書における「市民」と「長老会」の関係を解明することである。史料となるのは『バビロン（天文）日誌』と「バビロニア年代誌」と呼ばれるものである（以下それぞれ日誌、年代誌と呼称）。日誌は前7世紀半ばから前1世紀半ばにバビロンで継続的に作成され、天文、天候、農畜産物の価格、河川の水位などを記録したもので、前4世紀以降、歴史的イベントの記録も充実する。年代誌は歴史記録に特化したもので、前4世紀後半以降のバビロンで作成されたと思われるものが20例ほど知られている。これらの史料には「市民 *pulīṭē, pulīṭānu*」と呼ばれるギリシア・マケドニア系住民集団がしばしば言及される。彼らはバビロンに前2世紀前半に導入され、代表に「バビロンの長官 *pāhāt Bābili*」がいた。前2世紀前半から前1世紀半ばの史料に「市民」は53回言及される。そのうちバビロンの「市民」への言及例は31回あるが、ティグリス河畔のセレウケイアの「市民」も3回、ディヤラ流域と思われるカール・アッシュルの「市民」も1回言及される。既刊行の楔形文字史料には *peḷigānānu* が1回言及され、ギリシア語史料から知られる評議機関「長老会 *peḷigānes*」に比定されてきたが、「市民」との関係は不明確であった。しかし発表者が新たに解読したアルシヤク朝時代の日誌粘土板の記事に、「長老〔会〕と呼ばれる市民たち」が言及されていることから、「長老会」が楔形文字史料に言及される「市民」の中に組織されていたことが明らかになった。新出史料では問題の箇所前後に欠けがあって「市民」「長老会」が帰属する都市がどこかは定かではない。もしも彼らがセレウケイアの「長老会と呼ばれる市民たち」であれば、ポリュビオスから知られる、モロン反乱（221-20BC）終結時のセレウケイアの「長老会」追放（Polyb. 5: 54: 10）以後に「長老会」が再興されたことになる。もしも問題の日誌粘土板がバビロンの「長老会と呼ばれる市民たち」に言及しているのであれば、それはバビロンの「市民」の組織を明示する最初の例となる。新出史料の評価を決定するため、問題の粘土板の欠損部に接合する断片などを、刊本未収録の日誌断片のなかに探索していきたい。

2. ローマ支配下トリポリタニアにおけるフェニキア都市について：新ポエニ語碑文への分析を中心に

青木 真兵

本発表では古代地中海世界がローマの支配に組み込まれていく過程を具体的に考察することを目的とした。

対象地域はカエサルによって属州に組み込まれ、アウグストゥス治世に入って現地のフェニキア人執政官によってローマ都市への急速な変容を遂げたフェニキア都市レブキス・マグナを中心とする地域、トリポリタニアである。

対象とした碑文はトリポリタニアの新ボエニ語碑文集成76番であった。碑文は紀元後15-17年にレブキス・マグナとオエアのちょうど中間の地点に建立され、リビア人が新ボエニ語でエジプトの神であるアムン神を祀ったことが分かっている。

アムン神はエジプト西方砂漠のシーワ・オアシスを信仰の拠点とした神で、もともとはテーベの地方神で新王国時代にはエジプトの国家神であった。西方砂漠に接する現在のリビア東部（キュレナイカ地方）にギリシア人が植民都市を建設した第26王朝以降、アムン神はギリシア人にとってゼウス神と同一視されていく。かのアレクサンドロスもその神託を受けるべくシーワ・オアシスを訪れた。

一般的にエジプトの西方におけるアムン神崇拝は主にギリシア世界、特にリビアにおけるギリシア人の植民都市がある地域であるキュレナイカとの関係で語られるが、本発表ではキュレナイカよりもさらに西の地域であるトリポリタニアにおいて、なぜローマ帝政初期というこの時期に新ボエニ語でリビア人がアムン神を祀ったのかを問うことで、ローマ帝国下のトリポリタニアの時代状況を考察した。

3. 西地中海におけるフェニキア人の活動：サルディニア・スペインの事例を中心に

佐藤 育子

本発表では、地中海におけるフェニキア人の活動を、2013年10月と2014年3月にイタリア・サルディニア島およびスペイン・イビサ島で行った現地踏査の成果を踏まえて報告した。特に、西方のフェニキア系植民都市の類似点や相違点に着目し、後に母市であるフェニキアを凌駕して西地中海の覇権を構築するカルタゴとの関係も考慮に入れつつ検討した。

サルディニア島へのフェニキア人の入植は、考古学的には前8世紀半ば以降とされるが、入植の目的は先住民社会との交易にあり、航路上の地理的利点にあったことは間違いない。先住民の文化であるヌラーゲの建造物を一部改変・再利用した事例は、モンテ・シライやタッロスのそれに見ることができ、サルディニア島南部の沿岸部を拠点とした初期のフェニキア人コミュニティは、周辺のヌラーゲ社会と一定の共存を果たしたと考えられる。文献史料から読み取れる前6世紀後半のカルタゴの軍事遠征は、従来のフェニキアの沿岸ネットワークの強化に加え、より内陸の先住民社会への浸透を意図したものであったろう。

パレアレス諸島にあるイビサへの入植は、西方のガデス付近にすでに入植したフェニキア人が最初の植民者であろうと考えられるが、初期の植民の状況は、現在のサ・カレタ遺跡にみることができる。その後、フェニキア人の島における拠点は現在のイビサ市に移り、前6世紀後半以降、カルタゴの勢力伸長とともに、イビサの都市化の様相に拍車がかかった。イビサからは、サルディニアなど中央地中海との交易を示す考古学的遺物も発見されており、イビサの建設は、ギリシア人の一派であるボカイア人のイベリア半島への商業的関心を阻止するとともに、カルタゴの西地中海における商業的・軍事的ネットワークを強化する要因となったものと考えられる。

4. 6世紀アンティオキアにおける災害：被災者の視点からの考察

飯島 克彦

旧ローマ帝国領の再征服や建設事業、法体系の整備といったユスティニアヌス帝の治世に象徴される6世紀のビザンツ帝国は、地震や洪水、疫病の流行、異民族による略奪、ササン朝との戦争など相次ぐ災害に見舞われた時代でもあった。とりわけ、大火（525）、地震（526、528、551、557、577、588）、ササン朝による占領と略奪（540）、ペストの流行（542、560、580、592）と、繰り返し大災害に襲われたビザンツ有数の都市アン

ティオキアは、その象徴的存在である。同市の災害については、G. Downey の古典的名著が詳述しているほか、H. Kennedy や C. Foss の考古学的研究、H. Sonnabend による災害史研究などで取り上げられてきた。近年では、災害の心理的影響という視点からユスティニアヌスの時代を再検証している M. Meier も、同市の災害を扱っている。しかし、いずれの研究も被災した当事者の置かれた状況についての分析が十分ではないように思われる。そこで本発表では、526年のアンティオキアの大地震の記録を検証し、これまであまり顧みられなかった被災者の立場から、震災とその直後に彼らを襲った様々な苦難、彼らが期待できた救援活動と復興支援、震災後に彼らが取った選択について考察する。

526年のアンティオキアの大震災に関する史料（主にマラサスの『年代記』。プロコピオスの『ペルシア戦史』と『建築の書』、エフェソスのヨハネスの『教会史』、エウァグリオス・スコラスティコスの『教会史』、『柱頭行者小シメオン伝』、テオファネスの『年代記』などがこれを補う）を丹念に見ると、古代末期の被災者の実相が見えてくる。地震は建物の倒壊や火災により多くの犠牲者を出した。震災直後には略奪や火事場泥棒が横行し、そのために財産を失う者もいた。壊滅的な状況下で、一時は神に救いを請うばかりだった人々も、北の空に十字架が出現した後、当面大きな余震が収まったことや、オリエンス管区長官や皇帝の救援活動で落ち着きを取り戻していった。震災後、富裕な市民は自力で、一般市民も皇帝からの援助で町の再建を目指した。しかし、震災は孤児を生み、倒壊した建物の一部は打ち捨てられ、余震への恐れから町を離れる者もいた。アンティオキアとその周辺は、2年後の大きな余震を始め、その後も何度も災害に見舞われ、とくに6世紀前半、柱頭行者小シメオンの説教に見られるように、世の終わりを意識する風潮が強まったように見える。

5. シンドバード航海記の写本の分類と系統：筆写年入り写本として最古のペティス・ド・ラ・クロワ『アラブの物語 海のシンドバード』をめぐって 西尾 哲夫

シンドバード航海記はアントワヌ・ガランによって初めてフランス語に翻訳され、『千一夜』第3巻に収められて1705年に出版された。彼が底本とした写本は、本来の千一夜写本ではなく独立した物語として伝承されていたものだった。彼と同時代のペティス・ド・ラ・クロワも1701年に同物語を翻訳しており、その手稿（バイエルン国立図書館蔵、発表者により校訂出版予定）は1672年という筆写年が明記された、現存写本中で最古のアラビア語写本を底本としている。ペティス・ド・ラ・クロワは1653年パリに生まれた。父親は王の専属秘書兼通訳であり、息子の彼もその跡を継ぐべく東洋言語を学んだほか、数学、占星術、地理、デッサン、音楽を修めた。1670年に王の命をうけてシリア、ペルシャ、トルコに赴く。1670年11月から1674年4月まで、アレppoに滞在。その間、アラビア語、アラブ文学、トルコ語を学ぶと同時に、アラブ詩、アラブ音楽にも関心を持つ。本手稿の底本となるアラビア語写本はこの時に入手したものらしい。1692年3月1日、コレージュ・ロワイヤルのアラビア語教授に就任。これ以降はフランス国外には出ず、翻訳作業にいそしんだ。

これまでの研究によれば、シンドバード航海記は第七航海の物語を基準としてA版とB版に大きく分けられる。基本的にA版は独立した写本のかたちで伝承されており、B版はブーラク版やカルカット第二版のようなアラビアンナイトにおさめられたかたちで伝承されている。通説では、15世紀頃までのエジプトでA版をもとにした加筆が行われた結果、B版が成立したものとされる。A版とB版の違いとしては、第七航海の記述がまったく異なること、後者の方が細部描写をはじめとして文章が凝っていることなどがあげられる。ただし、1922年のカザノヴァによる簡単な紹介を除き、A版をめぐる従来の研究では、ラングレーによる校訂本を比較の対象とするだけで、個々の写本の異同による考察はなされてこなかった。本写本はA版に属し、物語構成や地理情報の面で他のA版と異なっているだけでなく、より古い形態を残している。本発表では同手稿を分析するとともに、最近発見されたキリスト教徒の伝承になるガルシューニー写本をはじめとして、発

表者によって確認された前記のカザノヴァによる調査のほぼ3倍にのぼる数の写本など、現存する全写本の分類と系統について考察した。

6. 『愛する者たちのジャスミンの書』におけるルーズビハーン・バクリー・シーラーズィーの愛(‘ishq)論

井上 貴恵

今回の発表ではルーズビハーン・バクリー・シーラーズィー(Rūzbihān Baqlī Shīrāzī, 1128-1209)の著作のうち、特に『愛する者たちのジャスミンの書』を使用して彼の「愛」についての議論を検討した。

ルーズビハーンはコルバンによる先行研究の影響により、愛についての議論がその中心教義であるとされてきた。また本人が特に初期の禁欲主義者、スーフィーたちの「酔語」と呼ばれる、忘我状態で発せられた非常に大胆な発言を好む傾向を見せたために「酔語の師」という異名でも知られた人物であったこともあり、長らく神と人の間の愛について情熱的に謳う、いわゆる「愛のスーフィズム」についてのみを専らの関心事として語ったスーフィーの一人であるとして、アフマド・ガザリーやイラーキーらと同じ潮流にあると分類されてきた。

発表者はこれまでのルーズビハーン思想研究の過程において、ルーズビハーン作品のうち、『酔語注解』と『聖性に関する書簡』、『神秘の開示』等を取り扱ってきたが、この過程において新たに中心教義であるとして強調したのは、ルーズビハーンの自分を含めた預言者・聖者とされる人々を特別視する姿勢であった。ルーズビハーン思想の根底には経験を通した、自らを含めた預言者・聖者への執着が根付いており、それが彼の思想の出発点であるからである。

今回の発表においては以上のような視点からルーズビハーンの愛の議論に関し、再検討を行ったが、その結果ルーズビハーンの愛の議論の特徴として、用語法、愛の神秘階梯に関する議論、「愛する者」の定義の3点を挙げ、この3点に的を絞って論を進めた。これにより、ルーズビハーンが愛の議論において、イシュクの語によって、イシュクについての議論を体系化し、イシュクを解する者たちの特別性を主張しようと意図していたことが分かった。以上の結果からルーズビハーンにとって愛の議論は、愛そのものに焦点が当てられているのではなく、特別な人々に顕著な1つの現象として捉えられていることが分かった。彼の議論の根底にはやはり預言者や聖者という特別な人々への強い意識が感じられるのである。

7. ジャーミーの信仰における宗教的实践と存在一性論の接点

宋 暎恩

ジャーミー(‘Abd al-Raḥmān Jāmī, d. 1492)は15世紀を代表する存在一性論者であると同時に、ナクシュバンディー教団のスーフィーである。彼は存在一性論とスーフィーの修行が互いに分離したものではなく、形而上学的理論と宗教的实践という二つの要素として一つの世界観を成していると見ている。彼は存在一性論における絶対的存在としての神が顕現して現れる諸状態が、修行を通して到達するスーフィーの霊的諸状態を指すと考え、神へ近付くための具体的な宗教的实践法を非常に重視している。

このような考え方は、存在一性論をテーマにして著わした自分の四行詩にさらに注釈を加えた作品、『存在一性論に関する四行詩注釈(Sharḥ-i Rubā’iyāt dar Waḥdat-i Wujūd)』によく現れている。この作品でジャーミーは存在一性論における必然的存在、神の顕現と個別化、一と多の関係などを総合的に述べた後、ズィクル(dhikr)やタワჯُّフ(tawajjuh)のような宗教的实践法と、その実践によって得られる精神的、霊的效果などを叙述している。

修行論の説明に当たって、ジャーミーはナクシュバンディー教団の始祖、バハーウッディーン(Bahā’ al-Dīn Naqshbandī, d. 1389)における宗教的实践の目標やナクシュバンディー教団の実践方法を具体的に提示してい

る。さらに彼はナクシュバンディー教団以外のスーフィーたちの言葉にも注目しており、存在一性論と実践論を通じて求めるのが、主と僕における関係性の実在 (ḥaqīqat-i munāsaba) 回復であると示している。

存在一性論とナクシュバンディー的実践を一つの体系と見なし、より普遍的観点から神と人間の真なる関係を模索したジャーミーの姿勢は、彼の霊的師匠としての行跡からも見出される。霊的スーフィー師匠としての彼の姿は、彼の直弟子、ラーリー (‘Abd al-Ghafūr al-Lārī, d. 1506) の『親交の息吹に対する注釈的補足 (Takmilah-i Ḥawāshī-yi Nafahāt al-Uns)』で確認される。この著作はジャーミーが書いた聖者列伝、*Nafahāt al-Uns* の連続的観点からスーフィー聖者としてのジャーミーを記述したものである。以上によって、存在一性論と宗教的实践を接合したジャーミーの宗教観全体がとらえられると考えられる。

8. アーザル・カイヴァーン学派の新出写本と再評価：ゾロアスター教、照明学派、ヌクタヴィー教団

青木 健

16～17世紀のイラン・インドで活動した神秘主義教団アーザル・カイヴァーン学派の思想的起源について、20世紀には、①ゾロアスター教の神秘主義的な発展形態（モーディーなど）、②スフラワルディーの照明学派の発展形態（コルバンなど）との2説が提示されてきた。更に、2000年代に入ると、③ヌクタヴィー教団のイラン民族主義的傾向をモンゴル支配下で推し進めた集団（シェフィールドなど）との新説も出現した。

近年、パトナー近郊でアーザル・カイヴァーンの墓廟 (maqbare) が発見されたとの報告があり、その写真が公開された。この情報が正確だとしたら、アーザル・カイヴァーンの宗教思想（ゾロアスター教徒は dakhmah を用いる）やパトナーにおける教団本部の立地条件まで推定させ得る貴重な発見である。

更に、照明学派とアーザル・カイヴァーン学派の思想的類似性の問題に関して、スフラワルディーの惑星讃仰詩や祈祷文の校訂出版が進められている。スフラワルディーのアラビア語讃仰詩や祈祷文の存在は、本人の弟子による文献目録から知られていたが、それらの内容が惑星讃仰であるとは今まで判明していなかった。この情報が正確だとしたら、照明学派との関係についても再考が必要となる。

これらの新情報に加えて、筆者は、新出のペルシア語写本の校訂と解説を基にして、この思想運動の中核的な担い手はゾロアスター教徒ではなく、時間意識と預言者論に関してはかなりの部分でヌクタヴィー教団——或いは、その背後にはイスマーイール派——の影響が認められ、用語に関してのみ照明学派の影響があったのではないかと推測したい。

9. 法頭は何故インダス川の難所、断崖絶壁の「懸度」を辿ったのであろうか。パキスタン北部地方「法頭の道」現地調査 (2012・2013)

土屋 選子

法頭はダレル渓谷で弥勒大仏像に参拝後、インダス川の難路「懸度」を15日辿りスワットに至った。「目も眩む千尋の峡谷、断崖絶壁に進もうにも足を踏む場所もない。眼下に新頭河（インダス川）が流れる。昔の人が石を刻み作った傍梯や吊り橋を七百も渡った」（法頭伝、長澤和俊訳より抄訳）。命をさらしてまで懸度を辿ったのか。

1913年 A. スタインは「陀歴」を Darel 渓谷と同定、第三次中央アジア探検調査の冒頭、ダレル調査後、法頭の道とは異なり、懸度を辿らず、隣接するタンギール渓谷にサルダイ峠を経て至った。人を拒否する峻険な峡谷であり又当時の政情のため、「懸度行」は許されず、不本意ながら、スタインはサルダイ峠ルート行を余儀なくされた。ダレル川下流、最終村 Giyal 村から Giyal 川渓谷を 1.6km 遡り、左岸 Shamkool 支脈渓谷に入り、1.6km 登り Lohilo-kot 砦に至り、ブグッチ村の同名の砦（通称 University Site）と同時代と推定した。酷暑を避け真夜中に急傾斜を5時間登頂、サルダイ峠 (3063m) に至り、スタインは念願のインダス川景観を望

見、「インダス川が流れを大きく南に転ずる地を見ましたが、ヨーロッパ人で、その地を目撃したのは、私が最初です」と懸度を一目でも見たいとの熱望が叶えられた喜びを記した。(ミルスキー (著)、杉山二郎他 (訳)『スタイン伝』下巻、40)

このサルダイルートに注目した。2012年7月の現地調査は、スタインの急傾斜の続くダレル側からの登頂を避け、タンギール渓谷の Rim 村より、なだらかで容易な道を登った。サルダイ峠でスタインを感動させたインダス川の景観を探し、稜線を少し南下した地点からようやく望めたのはインダス川のごく一部に過ぎなかった。それでもこれに満足したスタインが、如何にインダス川ルートを辿ることを望んでいたかが窺われた。シャムクール支脈渓谷を下り、Lohilo-kot 砦が防衛目的の砦と推定し、古道を確認した。2013年調査は、スタインルートのダレル側から登頂。聞き取り調査から、サルダイ峠ルートが一般的行程であることを再確認。法顕がサルダイ峠ルートをとらなかった理由は、当時の部族間抗争・道路事情等によるものか。古代交通路の観点から、謎が残る。

本発表ではスタインのサルダイ峠ルートの実地調査結果と、法顕のインダス峡谷の難路行とを比較し、古代交通路を検討した。

第5会場

1. 初期イスラーム時代エジプトの地域社会における教会・修道院の役割：中部エジプトを事例として

貝原 哲生

本発表では中部エジプトを対象地域としてイスラーム期最初の50年間におけるキリスト教会の役割を考察した。先行研究では7世紀末から8世紀初頭がエジプト在地社会の転換点とされる。この時期を境に中央集権化が進展し、ビザンツ時代には都市とその周辺領域の自治を担っていたキリスト教徒の在地有力家門が没落してゆく。

同様にキリスト教会をとりまく状況も変化した。修道士に人頭税が課され、教会や修道院に対する土地税はそれらの施設が耕作地の寄進を思いとどまらせるほどに増加する。また7世紀末以降相次いだ抗租反乱とその失敗により、キリスト教徒共同体の経済力が低下した。さらにムスリムとキリスト教徒との宗教上の差異が強調されるようになったことも教会とイスラーム政権との関係を変容させていった。これらの要因により、7世紀末以降、教会・修道院の社会的影響力もまた減退した。

これに対して、ムスリムのエジプト征服後最初の50年間について先行研究が強調するのはビザンツ帝国期以来の政治、経済、社会生活の継続であり、この期間は旧来の行政制度とその構成員である在地名望家層の地位が温存されたとする。しかし、この段階ですでに彼らはエジプト総督の徹底した管理下に置かれたことにより行政上の意思決定や財政政策、治安維持、司法における独立性の多くを喪失したと指摘する声もある。

全体的には旧体制からの連続性がある特徴でありながら変化の兆候も見られるこの時期のキリスト教会について分析すると、イスラーム帝国による征服以前に有していた所領経営者や徴税機構、治安維持といった社会的機能を維持していたことが明らかとなった。のみならず、教会や修道院、なかでも主教座にはイスラーム時代初期に地域社会の有力者の一角から第一人者へと浮上した形跡も見られた。そしてその理由はエジプトの最有力家門アピオン家の衰退と、在俗名望家層には備わっていない主教特有の役割にあったと考えられる。主教には飢饉の際に食糧供給の責任者となり、侵略者とは捕虜の身請けを交渉するなど、危地に際してその矢面に立つことが期待されていた。すなわち、混乱期に地域住民のパトロンの役割をこなす中で主教の社会的影響力が高まっていったのである。

2. イブン・アル＝ムカッファア著『*Risāla fī-l-Ṣaḥāba*』における理想の統治

田中 悠子

ヒジュラ歴132年（西暦749年）に革命を成し遂げた後、アッバース朝カリフは、革命に協力した様々な党派に対してカリフ権の正統性を示す必要性に迫られた。先行研究においては、このカリフ権の正当化のためにサーサーン朝の政治思想や宗教観が活用されたことが提唱されている。また、ヒジュラ暦2世紀以後イラン系住民のイスラームへの改宗が徐々に加速していくが、改宗知識人による翻訳・著作活動がアッバース朝政権によるイラン的思想の導入に貢献したことが指摘されている。ただし、この点を個々の著作から再検証するという作業は足りていないように思われる。

この点を踏まえて本発表では、異教徒として生まれ成人後に改宗したとされるイラン系知識人、イブン・アル＝ムカッファアが著した上奏書『側近に関する書簡 *Risāla fī-l-Ṣaḥāba*』を分析し、彼がいかなる君主像を望ましいものとして主張したのかを検討した。この上奏書はアッバース朝第2代カリフ、マンスールに献上されたものと考えられている。

まずイブン・アル＝ムカッファアは、物事をクルアーンと預言者の慣行による規定を有る領域と、そうした規定が無い領域に二分する。そして前者における規定の不可侵性を強調した上で、後者に関する決定権を君主の特権とする。彼によれば、信徒の長には「神から吹き込まれたラアイ ra'y（見識、理性、意見等様々に訳し得る）」があり、神の教えに立脚しつつラアイを働かせることにより、信徒の長だけがウンマの諸事に対して正しい判断を導き出すことができるのである。さらに彼は、学者達の独自の判断によって法判断の一貫性が損なわれるのを防ぐため、信徒の長のラアイによって法的見解を統合し「唯一で公正な」法典を作り上げることを提言する。この主張の中で彼は、「類推」や「ウンマの合意」といった後に法学議論で重要な意味を持つことになる用語を多用している。

以上の内容から、イブン・アル＝ムカッファアが本史料で提示した君主観は、イスラーム的な要素が強調されたものであると言える。神からもたらされるラアイという概念によって、神から啓示を受けた預言者を模倣した君主像を提示し、アッバース朝カリフの権威強化に有用な理論を提供しようとしたと考えられる。元異教徒である著者が努めてイスラーム的な概念を強調したことの意味を更に詳しく検討する必要があるが、これについては今後の課題である。

3. サアラビー著『アフラーク・ムルーク』における2種類のナディーム

中野さやか

本発表では、同一史料における「ナディーム nadīm」の使用法を分析し、「ナディーム」の用語が持つ多様性を論じた。ナディームとは「飲み仲間」を意味する。アッバース朝では、カリフの酒宴に著名な文人達が侍っていた為、従来の評価ではアッバース朝宮廷文化の担い手とされてきた。このように文化史的な重要性が指摘されているが、実際に史料記述を分析すると、「ナディーム」という用語は非常に曖昧な定義の下で使用されている為、個々の史料における「ナディーム」の使用例を検証せずに、諸史料を横断してナディームという集団の性質を論じることは困難である。そこで当発表では、9世紀中葉にムタワッキル宮廷に献上されたサアラビー al-Tha'labī の作品『諸王の諸性質 *Akhlāq al-Mulūk*』におけるナディームの使用例を分析した。この史料では、ササン朝宮廷の酒宴について、「アルダシールがナディーム達を三つの位に分けた。（中略）第二位のナディームには、王の話し相手、側近、ナディームを配した」という記述がある。この表現では、「ナディームの中にナディームがいる」という入れ子状態の二種類のナディームが出てくるが、この二種類のナディームを分析するにあたり、初出のナディームを便宜上「広義のナディーム」とし、その中に出てくる第二位の一部のナディームを「狭義のナディーム」とした。「広義のナディーム」はアルダシールの酒宴出席者全員即ち字義通りの「飲み仲間」と考えられる。一方「狭義のナディーム」については、スーリー al-Ṣūlī の『紙葉 *al-*

Awraq』におけるラーディー宮廷の酒宴情報から推察できる。この記述では、ラーディーの酒宴に、カリフの息子やアッバース家の教師、ハムドゥーン家、ムナッジム家が出席していたとある。全員がカリフの酒宴に出席している以上「広義のナディーム」と判断できるが、この中で「ナディーム」という以外の所属、肩書きを持たない人々がハムドゥーン家とムナッジム家である。両家ともムタワッキル期からラーディー期まで多くのナディームを輩出した一族であり、彼らが「狭義のナディーム」に相当すると考えられる。これらの「狭義のナディーム」についての諸史料の記述からは、ナディームとしてのみディーワーンに記名されていた人々であり、ナディームとしてのリズクが支給されていた可能性が指摘できる。

4. 12世紀以前のホラーサーンのウラマー社会における「よそ者」の位置づけ

西村 淳一

本報告では、主に12世紀以前にホラーサーン地方とその周辺で執筆されたアラビア語ないしペルシア語の地方史文献——具体的には『ニーシャープール史 (Ta'riḥ Naysābūr)』(正統編)、『バイハク史 (Ta'riḥ-i Bayhaq)』、『ブハーラー史 (Ta'riḥ-i Bukhārā)』、『ジュルジャーニ史 (Ta'riḥ Jurjān)』、『バルフの美質 (Faḍā'il-i Balkh)』など——におけるアラビア語単語ガリーブ (gharīb, pl. ghurabā') の用例を実際に紹介し、文献間の使用頻度の高低こそあれ、同単語が《(その都市／地方の出身でない、他の土地から来た) よそ者》の意味で用いられていることを確認した。それらの地方史文献では、その地方の出身でない人物であっても、その地方と何らかの関係があれば、その地方の出身者と同様・同列に伝記記事が記載されている場合が間々あり、読み手にとっては《よそ者》を区別しようとする意識が希薄に感じられる。しかしそもそもある特定の地域を対象としているという地方史文献の根本的枠組み自体が、地元を重んじる意識、また《よそ者》を区別する意識がなければ成り立ちえないはずであり、単語ガリーブの用例はまさにそのような意識の発露と言えよう。

一方で、地方史文献を執筆したウラマーにとって、《よそ者》を区別する意味、ないしは社会的背景とは、いったいどのようなものだったのだろうか。これについて本報告では、第一に「イスラームの教義において定められている《旅行者》と《定住者》の区別」が、第二に「ハディース学における、ある一つの都市／地方のウラマー集団をハディース伝承上の一単位とみなす考え方」が影響を与えているのではないかと、この試論を展開した。後者については、『ニーシャープール史』正編の著者であるハーキム・アンナイサーブリー (al-Ḥākim al-Naysābūrī (d. 405/1014)) の別の著作『ハディース学の知 (Kitāb Ma'rifa 'Ulūm al-Ḥadīth)』に見られるアフラード (al-afṛād, fard の pl.) というハディース分類に着目しつつ、ウラマーがハディース伝承上の必要な手続きとして《地元の人々》と《よそ者》とを区別した可能性を指摘した。ただしより詳細な検討は今後の課題として残された。

5. サファヴィー朝滅亡後のシェイフ・サフィー廟：王朝権力と地域社会の間で

阿部 尚史

本報告では、サファヴィー朝滅亡後のサフィー廟の政治権力とのかかわりと運営の在り方を検討し、廟が王朝の象徴という立場を失ってより地域社会に根差した存在に変化していったことを論じた。

イラン史研究において、アルダビールのサフィー廟は重要なテーマとして、王権との関係、文化史、社会経済史、民間信仰・宗教史などの様々な観点から数多くの研究がなされてきた。本研究で特に注目するのは、社会経済史的な問題である。文書史料に乏しいイランにあって、この廟については例外的に伝世しているアルダビール文書をもとに、古くはイルハン朝期に遡る王侯の寄進行為や廟自身による主体的な財産取得などが論じられている。ただし17世紀までについて一定の研究成果がみられるのと対照的に、サファヴィー朝滅亡以降の廟の在り方にかんして、研究が乏しい。サファヴィー朝期から、マシュハドのレザー廟やアタバートといった正統シーア派的廟の重要性が高まったことが明らかにされており、研究の上でもそうした傾向が反映されてい

るのである。

サファヴィー朝の象徴というべき宗教施設が王朝崩壊後いかに存続したのか、という論点はこれまでなされているサフィー廟研究を通時的に理解する上でも意義がある。それ以上に注目すべきは、社会的な重要性和王権の庇護を失った信仰対象・宗教施設がどのように自己存続を図ったのか、という論点である。本報告では、これまでの積極的に崇敬・寄進をあつめる廟にかんする研究とは異なる論点を提示することに努めた。

本報告では、文書等を用いて、18-19世紀における廟の管財人（モタヴァッリー）と監督人（ナーゼル）の性格と役割の変容を考察し、廟の契約文書摘要集 *Sarih al-melk* の利用実態に迫った。一連の考察により、廟が新たな王朝権力との度重なる交渉を通じて、旧来の特権を既成事実化していったこと、廟が政治権力から自立した主体として、アルダビールの地域社会との一体性を高めて、妥協しながらも自己の財産を保全していったことが明らかになった。つまり、王朝による手厚い保護・支援を期待できない故に自律的性格を強め、自己保全のために地域社会との融合を強化したのである。また廟は、19世紀後半に国家がシーア派としてイマームザーデを重視する傾向を利用し、財産保全のために国家の後援を獲得しようと試みていたことを指摘した。

6. イズミルにおける1893年のコレラ流行

鈴木 真吾

本報告では、1893年にオスマン帝国の主要商業都市であるイズミルを襲ったコレラ流行を、19世紀末のイズミルで発行されたオスマントルコ語の地方紙『ヒズメット *Hizmet*』に基づき考察した。1893年7月末の発生から11月の収束までに至る過程を追うことにより、日本のオスマン帝国近代史研究においてあまり関心が払われてこなかった疫病流行の問題を具体的な事例と共に紹介すると同時に、疫病の被害状況から浮かび上がる都市の貧困と衛生問題、民間新聞によるコレラ報道のあり方、隔離の実施による経済的影響、それに伴う貧困及び慈善といった諸点から、19世紀末期のオスマン社会を検討した。

中心史料としてイズミルで発行された地方紙を用いることによって、コレラ流行時のイズミル社会においてコレラ流行そのものを否定しようとする動きがあったことがまず明らかにされた。この背景には疫病流行による社会の混乱と経済の停滞を避けようとする意図があったが、コレラが猖獗を極めるにつれ流行を否定しきれなくなったため、結局は「コレラ」の文字を伏せ、必要最低限の情報を伝えるという報道姿勢に変化することとなった。

また、今回のコレラ流行において最も被害が甚大であったのはユダヤ教徒共同体であった。これはユダヤ教徒が当時のイズミル社会の最貧困層を形成していた事実と無関係でなく、ユダヤ教徒の集合住宅であるヤフードハーネなどの劣悪な居住環境や、路上で拾ったぼろや骨を売る屑屋といった職業がその要因の一つであったという可能性が指摘された。

地方紙を用いることの有用性はこのように自明である一方で、この限界もあり、今後は中央政府・州政府・都市自治体による諸策に関する文書史料やイズミルで発行されたフランス語やギリシア語などの民間新聞、イギリスやフランスの領事が記した外交文書、あるいはその他の叙述史料を併用しつつ疫病流行を多角的に検討することが求められよう。

7. エジプト・ムスリム同胞団における政治思想と活動の発展（1939-1954）

福永 浩一

本報告は、エジプトのムスリム同胞団の1939年以降における政治活動の変容を、組織の創設者ハサン・バンナーの論考、書簡や初期同胞団員による内部回想録を用いて明らかにすることを目的とした。

本報告では第一に、従来の研究で注目されなかった第二次大戦期のエジプトにおける二度の議会選挙（42年、45年）への同胞団メンバーの出馬とその際の見解、第二に大戦後の対英独立交渉下における国連やスーダン問

題に対する言説、第三に同胞団の非合法化とバンナー暗殺後（49年）以後の組織内の意見の分裂に焦点をあてた。

ムスリム同胞団は40年代以降政治活動を本格化させる。議会選挙への候補者擁立の試みに際して、当時の議会の党派的分裂を「イスラームの一体性」の理想から批判する立場をとり、同胞団の政治的スタンスとして「政党」の結成を志向しなかった。また議会を自らの教宣（ダアワ）を広めるための説教壇になぞらえ、イスラーム的改革の提示を試みたが議席獲得はならなかった。

次いで同胞団と国王、諸政党との関係を概観した上で、大戦後の独立交渉に関する諸問題への姿勢の一端を明らかにした。同胞団と当時の体制との関係は周囲の環境や内部事情により変動し、単純な図式化は出来ない。また「ナイル河谷の統一」や「1936年条約の撤廃」を早期に主張し、エジプトとスーダンが別個の国家ではなく一体となって英国からの完全な独立を目指し、47年のスーダン問題を扱った国連での交渉下でも積極的な主張を行なった。その影響力は限定的であったが、40年代の組織の巨大化に伴う政治活動の活発化を反映したものであった。

本報告では最後に、49年のバンナー暗殺が同胞団へ与えた影響を論じた。それまでの指導部の下での組織の統制が衰え、体制への接近の姿勢や武装闘争の是非をめぐる分裂を生じた。後継者で政治的に穏健な立場をとったフダイビーは、結果的に組織内部の急進派の反体制的傾向を抑えられず、バンナー時代と比較して政治活動、組織運営において弱体化し結果的に弾圧を蒙ったことを指摘した。

8. 「遺産」としてのホメイニズム再考

松永 泰行

本報告では、単にホメイニー（Sayyid Ruhullah Musavi-Khumayni, 1902-89）個人の思想やそれを核とする政治的イデオロギーの「遺産」という意味ではなく、ホメイニーが革命体制の指導者（および国家元首）であった1979年2月から1989年6月までの10年間に、新たに宣言されたイスラーム国家（*hukumat-i Islami*）の下での統治の一貫として、ホメイニーの発言・指示あるいはその同意を取り付けることで決定事項とされた種々の取り決めおよび、制度化された過程や組織が織りなした巨大政治プロジェクトの総体の「遺産」を、ホメイニズムと呼ぶとした。同様の巨大政治プロジェクトとしては、福祉国家や共産主義国家があったとした。

このように理解した場合、遺産としてのホメイニズムには、12イマーム・シーア派イスラームに沿ったイスラーム国家が持つべき必然的な要素に関わるものから、当時のイランが置かれた時間的・空間的・意味的な文脈の中で、状況依存的に制度化されたものに関わるものまで、様々なものが含まれる。より具体的には、イスラーム共和国体制とそれを広義の制度として支える諸々の（国家の年中行事等も含む）慣習および共通理解、その基盤を作った立役者および正当性付与者としてのホメイニー、さらに様々な政治的主体がそのホメイニーを巻き込んで合意へと持ち込み、先例・判例と化している諸判断・諸決定とその制度的結実が、ホメイニズムを構成しているとした。

このように理解することのメリットとしては、「遺産」としてのホメイニズムのポスト・ホメイニー期（1989.6～現在）におけるイラン・イスラーム共和国下の政治に対する影響について、その性格（具体的には、経路依存的な影響を与えるものかどうか）、範囲および含意（この結果、何が可能で何が不可能になっているか）について社会科学적으로考察することができるようになることが挙げられると議論した。

ポスターセッション

1. カルナク神殿におけるトットアंकアメン王のステラに関する調査研究

河合 望

エジプト新王国時代第18王朝のアクエンアテン王は、従来のアメン神を国家神とする伝統的な多神教を否定

し、新たにアテン神を国家神とする一神崇拜の宗教革命を断行し、テーベのカルナク神殿では、アメン神への祭祀と建築活動が停止した。この反動で、アクエンアテン王の死後、トットアンクアメン王によってアメン神を中心とする伝統的な多神教が復興された。テーベのカルナク神殿では、一連の復興事業に伴い、ステラが複数建立された。

本研究は、カルナク神殿出土のトットアンクアメン王のステラを調査研究することにより、同王のアメン神の信仰復興事業の一端を明らかにすることを目的としている。2014年3月にカルナク神殿で未刊行の2点のステラを含む計5点のステラの調査を実施した。本発表では、それらのステラの図像的特徴、技術的特徴、碑文学的特徴について検討した。

図像的特徴としては、王がロータスの花束をアメン神、ムウト女神に捧げているモチーフが主流である。ロータスは再生復活の象徴であり、信仰復興を表現していると考えられる。未刊行のステラ（Sheik Labibi 2001CL1）および第3塔門前のステラにおいて、王がアメン、ムウトの神々の他にセンウセレクト1世を崇拝していることが明らかであり、カルナク神殿の開祖である故王を崇拝することで、神殿の再興と王としての正統性を誇示することが図られたと解釈した。さらにもう1点の未刊行のステラでは、王の背後に矩形の窪みがあり、これは本来表されていた王妃アンクエスエンアメンの図像を削除した痕跡である可能性を指摘した。つまり、これは「記憶の抹殺」を示すものと思われる。

技術的特徴については、象嵌装飾の多いステラがあり、これらはアマルナ時代の影響によるものと推察された。また、浮き彫りには高浮彫と沈浮彫の両方が採用されていた。

碑文学的特徴については、第3塔門前の石灰岩製ステラおよび第7塔門前のステラ（H）は、既にヘルクによって刊行されているが、碑文記録を行った結果、数カ所で誤りと新たに判読可能な文字が判明した。碑文の内容は、『信仰復興碑』と同じく、アメン神を中心とする伝統的な神々への信仰の復興を基調としたものであり、創造神アトゥムと9柱神の前での戴冠、王とアメン神との同一視、アメン神殿聖所の復興、伝統的な神々の神殿の建設（復興）、アメンの聖船の神像の製作、アメン神殿への供物の奉獻、アメン神の祝祭の施行についての記述がみられた。

2. クフ王第2の船プロジェクト2012～13年度の活動

黒河内宏昌・吉村 作治・柏木 裕之・高橋 寿光・山田 綾乃

日本とエジプトが共同で行っている古代エジプト・クフ王第2の船発掘・保存・組み立てプロジェクトの2012～13年度の活動概要について、ポスター発表を行った。クフ王第2の船は紀元前約2600年頃に建造された大型木造船で、エジプト・ギザのクフ王ピラミッド南面地表下に掘られた船坑に、部材ごとに分解して副葬されている。これを取り上げて保存処理ののち、組み立て復原をすることがこのプロジェクトの目標である。

ポスター発表の内容は以下の4つの項目で構成した。

①プロジェクトの全体計画

船坑内の俯瞰写真を掲示し、これを取り上げ、保存修復、組み立てすることを目指すことを記した。

②木材保存状態の科学的分析

木材の成分分析表を掲示して、大エジプト博物館保存修復センター（エジプト）と勸元興寺文化財研究所（日本）で行った分析の項目と、結果の一つとしてセルロースが減少して木材が劣化していることを報告した。

③保存処理方法の検討

②の結果をもとに現在まで行ってきた保存処理方法の検討結果について、図表を用いて報告。広く保存修

復に用いられているパラロイド B72 と併用し、さらなる効果を生み出せる物質の模索について記した。

④発掘・保存・復原プランの作成と施設の建設

プロジェクトチームの班構成図と現場の施設写真を紹介し、発掘・保存処理・組み立て復原に向けた基本プランの作成と、それに対応して施設を建設したことを報告した。

そして最後に、本プロジェクトが作業の実務面を JICA 国際協力機構の支援を受けて行っていることを表記した。

3. インダス式印章の製作技術に関する考古学的研究：SEM と PEAKIT を用いた彫刻および穿孔技術の検討

小茄子川歩

分析対象であるインダス式印章とは、インダス文明社会（紀元前2600～1900年頃）において使用されていた凍石製の方形・押捺型の判子状のアイテムである。印面には一角獣やコブウシをはじめとする主モチーフと平均 2～5 文字程度のインダス文字が陰刻されており、裏面には紐を通すための穿孔されたつまみを認めることができる。

現在発表者は、インダス式印章が、どのような製作工程で、どのような製作技術および工具を用いて製作されていたのかを明らかにするために、製作実験に基づいた実証的検討を行なっている段階にある。

当ポスター発表では、現在進行中である製作実験の中間報告として、走査型電子顕微鏡（Scanning Electron Microscope, 以下 SEM と記す）と 3D 解析技術の一つである PEAKIT を用いて獲得したデータに基づき、インダス式印章の彫刻および穿孔技術の検討を行なった。

当研究では、インダス式印章に認められる製作痕跡としての陰刻や穿孔部分などの凹部にシリコン樹脂を流し込んで象りし、そのレプリカ（シリコン樹脂製の型）を SEM で観察する SEM 法と呼ばれる手法とレプリカそのものを 3D 計測することで作成した PEAKIT 画像を拡大して観察する手法を用いた。印章レプリカには、製作痕跡を含む印章の表面情報がほぼ完全に転写されているので、SEM と PEAKIT による製作痕跡の詳細な観察が可能となる。

彫刻および穿孔痕跡、彫りの断面形や深さなどから構成される各データを総合的に検討した結果、インダス式印章の製作には多様な製作技術および工具が用いられている可能性が高いことが明らかになった。印面に認められる彫刻痕跡は、印刀を印面に対して水平または垂直方向に動かす彫刻方法や回転運動を利用したドリリングなどの存在を示している。また印刀に関しては、少なくとも端部形状が扁平状のものと先端が尖ったポイント状のものが使用されていたと判断できる。

繰り返しになるが、現在発表者は、準備した凍石と自ら製作した錫青銅製印刀などを用いて印章の製作実験を行なっている。当ポスター発表における成果と現在進行中であるインダス式印章の製作実験の成果を比較検討し、印章の製作技術と製作工具のあり方を実証的に明らかにすることが次の課題である。

4. アッシリア後のパレスチナ：テル・レヘシュ第 8 次発掘報告

長谷川修一・月本 昭男・津本 英利・小野塚拓造

テル・レヘシュは現在の下ガリラヤ地方に位置する中規模の都市遺跡である。同遺跡では前期青銅器時代からローマ時代にかけて、居住地が断続的に形成された。2013 年より第 2 期発掘調査が開始され、目下、遺跡の頂部平坦面に広がる鉄器時代末期の大型複合建造物の解明が進められている。同建造物は中庭を囲む複数の建物によって構成されており、その規模は 50m 四方と推定されている。鉄器時代末期のパレスチナ北部における重要な拠点の 1 つであったと考えられる。第 8 次調査では、東側から中庭へ入る通路が新たに発掘されたほ

か、分厚い漆喰で仕上げられた階段状の遺構が発掘された。階段状遺構は複合建造物を構成する石壁に取り付けられており、石壁と同時期と考えられるが、埋土からはローマ時代の土器も出土しており、年代についてはさらなる検証が必要である。

上記に加え、本ポスター発表では、テル・レヘシュの鉄器時代末期層に属する出土物のうち、代表的なものと特徴的なものを取り上げて、年代や性格を検討してみた。出土した土器は、フィアレ杯を模倣した土器、ギリシア土器、モルタリウム、アンフォラといった器形から構成される。この土器組成を詳しく検討してみると、前7世紀末のレパートリーに見られる型式とベルシア時代初期に見られる型式の両方が混在していることに気がつく。また出土した金属製品のうち、型式学的研究が進んでいるフィブラと袋穂式三翼鏃に注目し、類例を集めてその年代幅を検討した。その結果、前7世紀末から前6世紀に相当する層位から、類例が出土していることが分かった。

以上の事柄を総合すると、鉄器時代末期のテル・レヘシュに建設された大型複合建造物は、現時点では、前7世紀末から、主に新バビロニア時代（前6世紀）に位置づけられる可能性が高い。実は、イスラエル北王国の故地においては、「アッシリア後」の様相が、先行研究においてほとんど明らかにされていない。したがってテル・レヘシュの今後の調査成果は、古代西アジア史研究の中で重要な役割を担うものと見込まれる。

5. ユダヤ食文化における浄、不浄の概念と土器型式

牧野 久実

古代パレスチナにおけるユダヤ社会は、ローマとの2度の戦争によって壊滅的な打撃を受けた。その後、ユダヤ人の生活全般を網羅的に規定する口伝トーラー、ミシュナが編纂され始め、紀元200年頃に成立した。本研究では、ミシュナに見られる器に関する浄、不浄の概念が成立した過程を探るべく、パレスチナの計9遺跡から出土した3,125点の土器片について画像を中心にしたデータベースを作成し、特に蓋を整理しながら現状と課題について検討を行う。

ミシュナは種子の巻、季節の巻、婦人の巻、損害の巻、聖物の巻、清潔の巻の全6巻から構成される。器の浄、不浄については清潔の巻のケリーム篇（器物その他の清浄）やトホロート篇（浄・不浄）に記されている。それによると土器は胎土の段階では穢れない。粘土の産地はどこのものでも問題なく、また誰がそれを工房に運び込んでも良い。一方、完成した土器はアム・ハ・アーレツ（律法を遵守しない者達）との接触によって穢れうる可能性がある。従って、律法を遵守する者のみが土器製作に携わることができる。ローマ時代初期にエルサレム近郊などにおいて特定の土器工房が成立するという指摘（A. Berlin 2005）やクムラン遺跡の水関連施設に関する解釈の見直し（Y. Magen & Y. Peleg 2007）はこの観点と一致するものである。

また、ミシュナには食生活を清浄に保つ方法として不浄物の混入をさけるための調理器や保存容器への蓋の使用と手洗いの重要性が記されている。その際の不浄物とは死体や昆虫などの地を這うものであり、不浄な食材として現在良く知られる豚や鱗の無い魚などの混入、また乳製品と肉類の混在を避けることなどは記されていない。また、壊れた土器を修復して用いたり、本来の目的以外の用途として用いることは不浄とされており、小鉢などの他の容器や壊れた容器の断片を蓋として代用することはなかったと考えられる。

蓋そのものに関する研究はこれまで行われておらず、分類基準についても曖昧が残る。今回の分析結果では蓋が後期ヘレニズム時代～ローマ時代で出土数が増え形態もより多様になっていることがわかった。ミシュナの記載からすると、他の用途に用いることができない形態、すなわち持ち手の部分が底部となりえない形状となる可能性があるが、持ち手が欠損している断片からは蓋であるかどうかを判断することは大変難しい。今後は北部などのデータ数を増やすことでより正確な結果を求めていく。

6. エジプト・ルクソール西岸で新発見されたコンスウエムヘブ墓について

近藤 二郎・吉村 作治・河合 望・菊地 敬夫・柏木 裕之

2013年12月下旬に、エジプト・アラブ共和国南部のルクソール市対岸アル＝コーカ地区で、色彩やかな壁画が描かれた保存状態の極めて良い岩窟墓を発見することができたので、速報をかねて報告する。今回の発見は、早稲田大学エジプト学研究所による新王国第18王朝アメンヘテプ3世治世末期の高官ウセルハトの墓（TT47）の調査中になされたものである。このウセルハト墓は、墓を覆う厚い砂礫のために20世紀初頭以来、約100年間、アクセスできない状態が続いていた。2007年12月からウセルハト墓の発掘調査を開始し、これまで7回の発掘調査が実施されてきた。今年度の第7次調査は、2013年12月23日から開始され、ウセルハト墓の前庭部の南側部分の堆積砂礫を除去していたところ、前庭部の南壁から掘込まれた内部に柱を持つ未完成の岩窟墓を発見し、エジプト考古省のインスペクターと未完成墓の内部を精査中に、未完成墓と接したコンスウエムヘブの墓を発見した。

この墓は、これまで知られていないもので、描かれている壁画や碑文から判断すると、古代エジプト新王国ラメセス朝時代に年代づけられる。おそらく新王国第19王朝末期～20王朝時代と推定されるが、詳細は今後の調査に待ちたい。墓の被葬者は「ムウト神殿の醸造長」、「ムウトの工房の長」の称号を持つコンスウエムヘブで、彼の妻は「ムウトの歌い手」の称号を持つムウトエムヘブであることが、壁画や彫像に記された碑文から判明している。

コンスウエムヘブ墓のプランは、いわゆるT字型墓で、南北に細長い前室とその西側に奥室が位置している。墓の前室の壁面には、色彩鮮やかな図像が描かれている。被葬者のコンスウエムヘブと妻のムウトエムヘブや彼らの家族たちは、オシリス神やアヌビス神、ラー・ホルアクティ神など古代エジプトの神々を礼拝している。コンスウエムヘブとムウトエムヘブに対し、彼らの息子たちが捧げ物をしている場面なども含まれている。中でも、前室の東壁の北側部分に描かれた壁画は注目される。上段には、小ピラミッドをもつ墓前でコンスウエムヘブのミイラが立てられ、その足元で妻と思われる女性が悲しみ嘆いている。また、息子と思われる男性がミイラに香炉と聖水を捧げている。後方では子供を含む男女の葬列が描かれている。また、下段には、死者を運ぶための船が色彩鮮やかに描かれている。

7. メロエ遺跡製鉄炉の民族考古学的研究

関廣 尚世

第55回大会の口頭発表「古代スーダンにおける鉄器使用と製作技術試論」では、P. シニー（Shinnie）がメロエで発掘調査した製鉄炉の構造について言及した（以下、メロエ炉）。メロエ炉は2基一対で、中央にボシュと呼ばれる方形坑を穿つ。そして、壺輪が周囲に6基設置されるというものである。また、R.F. タイルコート（Tylecote）は、シニー検出例と、メロエ遺跡内の他の地点から出土した遺物との比較研究も行った。これらは、古代スーダンの製鉄および鉄器製作技術研究史上の重要な研究である。しかし、製鉄技術の包括的な復元にはまだ不十分な点もあるため、時期的・地理的に近接する地域での調査研究成果からの援用が必要である。

スーダンに北接するエジプトでは、古代製鉄炉の構造が明確な検出例は見受けられないが、新王国時代の貴族、レクミラの墓壁画が比較材料となる。タイルコートは、同壁画が非鉄金属生産の描写であり、メロエ炉の操業時期と1,000年以上の隔たりがあるにもかかわらず、比較研究材料とした。タイルコートは踏み輪に着目し、古代スーダンも同じ形式の輪を用いていたとした。

しかし、メロエでシニーが検出したのは壺輪であり、構造上、その上に人間が乗るのは困難と考えられる。そこで、輪の上に被せた革の中央に穴をあけ、そこに棒を差し込んで固定させ、それを上げ下げすることで送風を行うという形式の輪をシニーは想定した。

こうした形式の鞴は、スーダン（厳密には南スーダン共和国）に南接するエチオピアでの民族学例の中に見られる。本発表では、エチオピアで20世紀半ば頃まで用いられていた製鉄炉（以下、エチオピア炉）の築炉実験成果との比較を行った。メロエ炉とエチオピア炉は鞴の形式がほぼ同一であるだけでなく、炉本体の規模、鞴の数と規格もほぼ同一であることが判明した。古代エチオピアにはアクスム王国が栄え、明確な炉跡検出事例はないが、首都アクスムからは鉄製品が多数出土し、周辺には採鉱地と推定される場所もあり、製鉄が行われていたと考えられる。明確な遺構検出例が見受けられないのが現状であるが、民族学的な成果から、古代スーダンとエチオピアの間に製鉄技術上の関連性があった可能性は高い。

本大会口頭発表では、古代スーダンの文化成立背景の多様さについてふれたが、製鉄技術においてもこうした多様性が確認できると言える。